明治廿六年拾月五日發行

女鑑

第四十八號

東京國光社

女鑑第四十八號目次

湯淺瑠璃子



女鑑

世の諸孃に望む

女子の、進みて、高等の學科を修むべきは、世運の、既に許すところにして、數年の後は、定めて、女子大學の要用を見るに至るべし。吾人は、誠に、之を慶ぶものなり。然れども、今日の女子は、一方には、かくの如く、進步したるにもかゝはらず、他の一方を顧みれば、自己の姓名さへ、記し得ざるもの、甚多し。小學教育に於ける統計によらば、男女生徒の。就學、不就學の差異は、如何に成り居るにや、今、之を詳にすることを得ずと雖、小學校を卒へたるもの、、直に、世事に當りて、誤なきが如きは、到底、期すべからざるところにして、且、不完

全なる教育を受けたるものゝ、却りて、事を誤り、身を誤り、寧、教育なき純撲のものに如かざるは、世の、既に、經驗するところなり。而して、女子に、中等教育を授くべき學校とし云へば、寥々として、指を屈すべき程にして、地方に入りては、一二府縣を除く外、全く、之なしといふも、不可なきが如し。かくの如くにして、いかでか、完美なる令孃、夫人の性格を作り、男子の發達に伴ひて、一般女子の進歩を遂げ得べき。都會、又は、富豪のものは、隨意に、高等教育の德澤に浴すべきも、今日、一般の女子は、大半、小學教育に誤られて、身も、心も、不完全なるものといふべきなり。此の如くにして、いかでか、人の妻となり、人の母となりて、よく、其の天職を盡くすことを得んや。

抑、女子の職は、仰ぎて、父母に事へ、入りて、夫を助け、下りて、兒子を養育

するものなれば、其の事業に限りあるもの、如しと雖、兒子を教育するが如きは、實に、天職中の、最、名譽に、且、至重至難なるものにして、教育學の進歩するに伴ひ、家庭内の育兒法をも改善せざれば、世益を助くること能はざるのみならず、實に、之を害ふものなり。豈、畏れて愼まざるべけんや。

夫、小學教員の如きは、既に、嚴然たる師範學校の設ありて、以て、其の舊態を改良することを得たるが如しと雖、獨、人間最初の教師にして、且、家庭の全權者たる母にして、改善するところなからんには、其の兒子を害ふこと、幾何ぞや。

蓋、女子の中等教育に、教育學の一科を備へざるべからざること、理に於いて、誠に然るのみならず、既に、歐米到る所、みな、經驗に於いて、しか云へり。吾が邦の如き、中等教育の普及せざるところにありては、之を言ふも、行はれざ

るが如しと雖、今日の儘にて、打棄て置かんか、誤謬に誤謬を重ねん。是、吾人、一策を献じて、以て、世の諸孃に望む所以なり。

夫、衣食足りて、禮節を知るとかや。今や、秋風凄涼、惰夫もつゞれさすてふ時なれば、萬戸砧の音せぬ夜半こそなけれ。今一二月を經なば、五穀成り、倉庫滿ちて、田舍は、特更、太平の樂あらん。この時に當りて、各地方の、戸口數多ある地にては、女子講習會などを開き、教育學の講話を專とし、其の地の狀況によりては、家事經濟、家内衛生等の講話をも加へ、一月が程も、開會したらんには、いかに、有益なるべき。講師は、其の地の、學士、先生に請ふも可なり。又、教育會の如きも、宜しく、このところに注目して、需に應じて、適當の人を派遣するも可ならん。或は、適宜の教育學大意の著述をなし、之を頒つも、亦、可な

らんか。此の如きこと、宜しく、慧敏先覺の諸孃ありて、其の輿論ともいふべきものを造り、世に、之が意見を質しなば、世の教育家たるもの、亦、こゝに着目するに至らんか。吾人、敢て、世の諸孃に望むところは、これ等のことに就き、いかに思召すかを聞かんと欲するが爲なり。

論說

女堂心訓（其の壹）

長井行

緒言

兒女生まれて、一定の年齡に至るまで、ある區域內に於いては、家庭の教育を崇らざるはなし。家庭の教育は、人生まれて、避くべからざるものにして、而し

て、一生の思想、行爲、實に、この最初の教育たる家庭の感化に係るところ多しとす。されば、教育中、最も痛切なるものは、家庭の教育にして、而して其の教師たるものは、父母双親に關すと雖も、又實に、母の擔ふところ多大なりとす。しかるに、母にして、教育學の心得なければ、其の兒女を愛する心根よりして、却りて、之を害すること多し。これ、世の女子中等教育に於いて、教育學の一科を要する所以にして、吾輩が、こゝに、女堂心訓を著すも、これが爲なり。

抑も、人生最初の教育たる、即所謂家庭教育なるものは、文字を以て傳ふるにあらず。學科を設けて習はしむるにあらず。即其の教師たる母、(今專母親のみを擧ぐ。)が、冥々の中に、陰然感化するところ、浸漸するところの勢力にして、而してこの勢力たる、到底、後年學校に於ける教師の權力、又は社會の是非譽貶に打ち

勝つものにして、兒童の性格は、正しく、母たるものゝ薫染に在るものたり。(勿論、遺傳はあれども、今專ら敎育を說く。)而して家庭内の書籍とも、科目ともいふべきは、實に左の數のものたり。

(イ)母たるものゝ愛情、

(ロ)母たるものゝ平生の行爲、

(ハ)母たるものゝ、平生の音聲、及び面色、

この(イ)の、即母の愛情は、母たるものゝ心情なれば、この中、最も重要のものにして、兒童の命運を決する第一の豫占たり。母たるものゝ徒に私養に溺れ、或は、寒暑に慣れしめざるが如く、暗黑、又は少しく危嶮のところに立ち寄らしめざるが如きことあらば、この兒は、自身體の羸弱なるのみならず、臆病怯懦にして、

壯後に至るも、決して、其の慣習を脱する能はざるべし。又母たるもの、常に其の兒童に期するに、學者たるを以てせんか。兒童の希望は、自學者たる途を辿り、軍人たるを以てせば、軍人の風格を取るが如く、兒童を期待する母の愛情は、常に其の兒の進路を導くこと、又明かなりとす。畢竟、人の決斷力、義俠心、自信力等は、實にこの母の愛情によりて、或は之を養ひ、之を損するものにして、彼の繼子の性癖、自邪曲に陷るもの多きも、實にこれがためなり。されば、母の愛情なるものは、其の子の一生の命運を造り出たすものにして、母たるものの、深く顧みるべきところなり。

次に、(ロ)の、母たるもの、平生の行爲とは、其の柔媚たる、又は威儀ある、又は輕卒なる、みな其の平生の素振を指すものにして、其の母たるもの、知らず識

らずの間に發する時々刻々の擧動は、實に兒童の薰染に、大なる影響を及ぼすものにして、母たるものゝ、又最も顧みるべき所とす。孝子の門に忠臣出づ。其の母にして、夫に不順なるものあれば、其の兒は、又必父母に不孝にして、其の母の謹厚にして、其の兒の輕躁なるが如きは、多くあらざるところとす。

(ハ)に至りては、又前の(ロ)と同じく、而して(ロ)と最も密接なるものなり。音聲面色は、意思感情の符號にして、心の影なれば、噪急なるものは、噪急なる音聲あり、寬和なる心には、寬和なる面色あり。或人の談に、口吃なる母は、其の子、必滑稽の性ありと云へり。穴勝謂なきにしも非ざるなり。

此くの如く、母の一思一念一言一默も、みな兒童の一生に關するものなれば、母たるものは、其の兒を育せんとするに當りては、瞬時も放逸なるべきものに非

す。而して母たるものゝ、其の兒女を感化薫育するは、重に道徳の點にありて、規則正しき智識的教育を要するなきなり。故に母たるものゝ、其の道徳を高め、以て兒童の摸範を示さゞるべからず。而して之に加ふるに、世の女子たるものをして、教育學の何たるを知らしめ、自己の感化が、如何に兒童の一生に關係するやを知らしめ、以て兒女前途の幸福を祈る念を養はしめざるべからざるなり。是れ吾輩の女堂心訓を講じて、以て世の女子に質す所以なり。

女子要言　第二篇　（十九）

三輪田眞佐子

然れども、女子の交際は、頗慎むべきことなり。何となれば、其の世務に迂きと、輕信し易きとの二者より、禍を買ふこと多ければなり。故に、顔氏は、女子

聰明才智、古今に達するものあらば、正に、君子を輔佐し、其の足らざるを勸むべし。必、牡鷄、晨に鳴き、以て、禍を致す勿れ。と戒めたりき。即、女子は、格別、世務に關係すべからず。從ひて、交際も廣くせざるを良とす。近頃、我が國の女子、歐米婦女に倣ひ、口を、交際に假り、多く、時を費し、財を投げ、良人の怒に觸る丶もの多しとかや。吾が言ふ所のものは、斯の如き意にあらず。故に、試に問はん。江東婦女、略無交遊一。其婚姻之家、或數十年間未二相識一者上。唯以信命贈遺一、致慇懃一。と云ふ如き女子の交際法と、又、鄴下風俗、專以婦持門戶一。爭訟曲直一、造請逢迎、代子求官、爲夫訴屈。此乃恒代之遺風乎。と云ふ如き女子の交際法と、何れか勝れりと撰らぶや。吾は、日本女子は、眞の日本女子となり、飽くまで、敬愛靜淑の美德を守り、終始、其の德を以て、人に接すべし。

今日、若年女子教會等にて、妄に、男子に交はり、多く、醜聞を醸すを以て、交際の本面目と信ずるものありとせば、大なる誤なり。抑、男女、恣に會合するは、背徳の所爲なり。而して、眞の交際なるものは、各人、社交上の必用より、禮を以て經となし、義を以て緯となし、之に加ふるに、敬を以て、相關係するものを云ふなり。

蓋、誰か惜しまざらん。正宗の利刀を、未磨かずして、以て、用なきものとするを。女子も、無學無識にして、世人、其の心を信じ、其の言に委ぬることを肯んせず、己も、亦、自暴自棄の姿にて、其の天職なる交際を事とせざるは、遺憾の至なり。之に反して、智を練り、能を養ひて、心、言、共に、決して、禍乱の緒とならざる女子にして、人心を結ぶことを務めなば、其の効徳如何ぞや。西暦千八

百九年、「マヂソン」、合衆國の大統領たりしが、當時、外は、英國との間に、戰爭起こり、内は、政黨の軋轢甚しく、以て、政府を攻撃せり。然れども、「マヂソン」は、八年の長日月、其の至難の任を、自尽しゝは、不可思議なりと雖、其の夫人「ドルレーペーン」、南風の薫する如き温柔以て、逢ふ人、交はる友の、久しく結びて解けざりし仇敵の怨恨不平を治めたりければ、各反對の首領さへも、怡々として、「マヂソン」に歸服するに至れり。亦、現任大統領の、其の位置を得たるも、尚、其の妻の交際、與かりて力ありとかや。然れども、惜しいかな。今日までの女子、多くは、無識の故にや、交際以て、遠く、世を益することを能はざるのみならず、却りて、近く、一家離間の源因とさへなりたりき。故に、古人は、人家兄弟、無二不義一者。盡因二娶レ婦入一レ門、異性相聚、爭レ長競レ短、漸漬日聞、偏愛私藏一、以

致背戾、分門割戶、患若賊讐、皆汝婦人所作。と戒めたり。否、我が現今の女子中、或は、未、斯の如き邪念の絕えざるものもあるに似たり。改むべきことにこそ。

人に接すると云へば、頗廣きことなりと雖、良人に向ひ、能く貞に、父母に事へ、能く孝に、兄弟、及、親族に對し、能く信實にすべきことは、既に、女德中に述べたり。されば、茲には、單に、他人との交際、及、僕婢の使役等につき、聊述べん。先、他人との交際を、圓滿にせんには、

第一　親切なるべし。　林子平曰はく、人に交はるには、虛言虛辭なく、誠實を以て、主とすべしと。理ある言かな。凡、人と親睦を結ぶは、外力の、能くする所にあらず。必、心力に由るものなり。這は、匹夫も、志を奪ふべからざる

ものなれば、己、誠實を盡くさずして、人の歡心を買はんと欲するは、木に緣りて、魚を求むる類なればなり。故に、假令、仇敵と雖、之に交はるもの赤誠發して、紅涙降らば、恐らくは、感服せざるものはあらざるべし。否、彼、寧、胸襟を披きて、刎頸の友たらんことを願ふに至らん。殊に信を以て交はらざる知己は、眞の知己にあらず。而して、女子の交際たる、多くは、世業に關せずして、感情の調和にあるを以て、親切は、女子の交際上、唯一の道なり。

第二　愛嬌あるべし。

吾が言ふ處の愛嬌は、人を欺かんための虛飾の分子を含むものにあらざれば、毫も惡むべきものにあらず。唯、心の盛德、外に發し、自然、人を感ぜしめ、且、歡ばしむるに足る女德の一端なり。抑、女子の交際たる、天性上、及、職分上、他人との懇話、屢々なる能はざるものならん。亦、往

復、數々なる能はざるものならん。これを以て、唯、愛嬌以て、良人の交際を助け、世の老者を安んじ、幼者を懷くるを以て、肝要とす。是、女子の交際と、男子の交際と、相異なる点なり。然るに、毫も、一家の必要なくして、良人、及、父母の意に戻り、放逸に、時日を消し、而して、一般人には、反りて、顏色邪氣を帶ぶるにあらざれば、誇氣揚々として接し、遂に、多くの人は、陰に、之を彈指するも、己、自、西洋流の交際女子と思ふ人あるこそ、可笑しけれ。

尚、世辭も、事と品とに應じて、或は、用ゐるも、妨なきことありと雖、巧言令色鮮仁矣。と人より信任せられずして、反りて、擯斥せらるゝ媒介をなすものなり。されば、世辭は、一概に、多く使はざるを良とす。唯、他人を尊敬する餘、所謂、言語の言様を、上品にする時に限り、用ゐるも妨なしと云ふべし。古人

の、籧際と戚施とを惡みし所以は、此の世辭的諂諛を斥けたりしゝ外ならず。請はくは、口ゝ密あり、腹ゝ劒ある鬼人たる勿れ。

史談

湯淺瑠璃子の小傳

尾石美豆紀

瑠璃子は、備前岡山の藩士瀧陳良の女なり。幼より、敎を家庭に受け、讀書を好み、稍長じて、女技に精しく、治家經濟の道より、管絃歌詠の末技に至るまで、通せざる事無し。天資靜淑、性行端正、父母に事へて至孝、年二十八にして、甫めて、同藩の士湯淺羐に嫁す。羐は、子傑と號す。家富みて、學識あり。初め、藩主池田光政に仕へて、近侍と爲り、次第に立身し、光政の子政繼の代に及びて、終に監察に進み、百般の藩政、預かり聞かざる事無し。瑠璃子、湯淺氏に嫁してより、家を治むる事嚴肅、婢僕を使ふに恩威あり。特に、夫に仕ふるに、常に恭敬を持し、間居

の時と雖、毫も禮を缺かず、恰も、臣の君に仕ふるが如くなりしかど、子傑も、亦妻に對して、常に禮を盡し、其の敬愛の狀、恰も、賓を待つが如くなりしと云ふ。此等の風儀、いつしか、家内を感化し、子女婢僕に至るまで、常の習と爲れり。子傑監察に任せらるゝに及びて、家にある事少なく、家事を擧げて、妻に委任し、復一切内事を問はず。又、屢江戸に下役せしに、瑠璃子、家事を處するに、自ら法度を設け、大小の事、悉く之に據りて處置し、嚴乎として紊れず。傍其の兒の教育に最も意を用ひぬ。子傑の人と爲り、恭儉にして、慈愛の意深く、家、固、數千金を累ぬ。其の兄某、故ありて、出でゝ伯父の家を嗣ぎしに、其の用に乏しきを見て、則、其の有る處の金銀器物を三分して、其の二分を兄に讓り、其の餘は、妻と協りて、宗族中の用に乏しきものに施せり。後年、老を告げて致仕し、幾程もなく、病に臥しゝに、瑠璃子、衣帶を解かず、晝夜湯藥に侍する事、前後六年、一日の如く、毫も倦色を見ず。元文元年、子傑身まかりぬ。此の時、瑠璃子、亦年老ゆと雖、其の子元禎、未だ室無かりしかば、猶、自ら婦功を取り、暇あれば、史を讀み、歌を詠じ、時に箏を鼓して、自ら娯しめり。瑠璃子、又、生來、嘗て、淫樂(浄瑠璃、葉歌など

稱するもの、三絃の類を聞きし事なく、倡尼巫祝の徒を近附けず。特に、奢侈の風を惡み、自ら奉ずる事の薄きは言ふまでもなく、衣服飲食其の外、家を治むるに、嚴に儉約質素を守り、一錢たりとも、有要外の財を費さず。され共、天資慈仁にして、甚、施與を好み、人の困窮を聞けバ、親疎の別なく、之を恤み、爲に家内の缺乏を告ぐるも、些も意と爲さず。又、常に、客を待つ事、甚篤く、必ず留めて、酒饌を供せり。其の子元禎の幼時、讀書復習、其の他の事も、皆日科を定めて、自ら是れを考試し、暇には、和漢の故事を談し聽かすを常と爲り。嘗て、彼の清少納言が、香爐峯の雪は如何にとの　令旨を承り奉りて、直ちに起て、御簾を捲きし故事を述べ聞こえて、當時婦女すらも、學識ありて、其の心の敏捷なる事、此の如し、今日偃武の世、幸にして、男子に生まれ、武技をいそしみ勵むべきは、更にも言はず、不文無學なるは、亦愧づべき極なり。汝宜しく、勵み勉むべしと云へり。元禎、小字は新兵衛、長じて、常山と號す。幼より、教を家庭に受け、父母に事へて至孝、後、江戸に遊びて、學問大に進み、父歿して家を嗣ぎ、終に一世の鴻儒と爲れり。且仕へて要職を歷ぬ。其の職にあるや、常に貧を賑はし、窮を救ひ、匿を詰り、滯

を擧げ、時に契券を燒きて、衆人を庇蔭せし等、再び父母の性行を世に顯しぬ。後故ありて、仕を辭し、門を杜ぢて、身を經籍に委ねぬ。常に子弟を戒めて、苟も武士たるもの、寧、文事を廢するとも、武事を廢する事勿れと云へり。其の著書廿餘種あり。戰國の世、義に死し節に伏し、忠臣勇士の跡を記せるもの多し。其の內、常山紀談、夜雨燈の如きは、今の世にも、活字に飜刻せられて、世の人の知る處なり。

按ずるに、常山は、天明元年四月九日、七十四歳にて歿すとあれば、元文元年、父子傑の歿時は、正に二十八歳也。又子傑は七十七歳にして致仕し、六年を經て歿するよし見えたれば、瑠璃子、此の時、若くも早六十歳以上なりしならんか。其の歿年等も、未だ精しく考へ得ず。抑、瑠璃子の性行を視るに、婦人の美德として、殆ど備へざるもの無く、才かも學ありて、能く卑り、識ありて、能く處す。宜なるかな。此の妻ありて此の夫あり。此の母ありて此の子ある事。一片の小傳、天下人の妻たり母たるもの、亦以て龜鑑と爲すに足りぬべきか。

淺羽惠知子

松野操雄

容貌いかほど美しくとも、學問技藝の心得なき婦女は、些も賞むべきにあらず。學問技藝の心得ありとも、貞淑婉順ならざれば、遂に尊むに足らず。貞淑婉順なりとも、兒子を育養すること能はざれど、人の母たるに於いて、大に缺くるところあり。噫、生まれて、婦女となる、誠に難からずや。

淺羽惠知子は、德川幕府の臣淺羽共常が第四の女なり。年二十一にして、小出大助に嫁けり。容貌人なみにすぐれ、品行よくをさまりて、常に、戯れあそぶことを好まず、驕り高ぶることを惡めり。又、舅姑に事ふること、いと懇にて、兒子を敎へ導くこと、甚いたれり。加之、儉素を守りて、家事を治めしかば、家裕になりて、夫をして、更に、内に顧みる累なからしめたりき。されど、大助は、よく劇職にたへて、勉め勤しむことを得たりけれど、顯榮の地位を占むるに至れり。はじめ、微賤より起こりて、代官、郡代等の職を經て、竟に、二丸留守居の職を獲たりしも、惠知子、與りて、大に力ありきと云ふ。惠知子、其の子を敎ふるに、尤、こゝろを用ゐたり。若、諸子の中に、文武の課業を怠ることあれど、懇に、これを訓へ諭し、猶用ゐざ

るときは、自、その身をせめて曰はく、われ愚にて、かくの如き游惰の兒を生めり。といひて、大に泣き悲みけれど、兒子、これに感悟して、その行を改め、復、懈ることなかりき。又、嚴冬のころ、諸子、寒稽古をなすとて、毎朝、はやくより、射騎槍劍などの演場に往むときは、必、自起き出でゝ、湯を沸かし、粥など調へて、之を食はしめて、かりにも、婢僕などには、委ねざりき。かく、自勉め勵みて、專、敎育せしにより、あまたの兒子等、成長の後、世に用ゐられて、みな良士となりしとぞ。

かくの如き婦人こそ、婦行に缺けたるところなき完美の婦人といふべけれ。あはれ、世の婦女たる人、これを讀み見て、これにも增したる婦行あらば、たゞに、編者の幸福のみにあらざるなり。

家政

育兒小言（三十五）

武谷水城

慣習の事（つゞき）

此く青年兒童の体質に、強弱の差あるは、單に其人の天稟なる樣なれ共、其實は、乳養中よりの小兒の身の仕附方、則慣習、因と爲るもの多し、（猶其初起に溯る時は、懷妊中の、母の身の持方に因る事多し、そは前に述べ置きぬ）例之バ、乳養、又は乳斷後の不注意、其の他一般飮食の不注意より、胃弱を釀して、終身痼疾の因を爲し、或は着服度を得ず、常に厚きに過ぎ、爲に皮膚薄弱と爲りて、總ての病氣に感じ易く、身体尫弱の原と爲り、又、日光、風氣、に觸れしむる事少きものは、何程良好の衣食を與ふるも、自然に貧血と爲りて、救ひ得べからざる薄弱の体質と爲り、或は足地を踏む事無く、運動足らざるものは、筋肉骨骸の發育、勢なく、不十分にして、決して強健の体格と爲る事能はず、（一二の例を擧ぐ、他は准へ知るべし、）此等は皆、小兒を大切よ仕立てんとして、其の方を誤り、知らず識らざる裡、いつしか反對の結果を生ぜしものなり、斯る身体の慣習中に成育せるもの、一方には、其の腦力も未だ完全ならざるに、既に多少幼稚の心を勞すべき學に就き、次第に學海の苦を嘗めざるを得ず、於茲乎、彼の過度の使用と、不及の使用とは、多少相混合し、

習ひて恒と爲る、身体尫弱の青年が、比較的に、一部の種族（心を勞する事過度なるもの、身の運動足らぬものに、多きも、理の應に然るべきものと言ふべきにや、但し、學童の就學は、其の年齢に應ずる程度と、方法とを得バ、啻に害なきのみならず、心身の發育をも奬進する事、大なるものあるべきは、言ふ迄も無かるべし、只、今日の青年兒童は、昔日の青年兒童と、心神を使役するの度、大に同じからざるものある事を記憶し、其の勞心の度に應して、彼の心神の機能の根元たる、体力の養成方を怠らず、其の体力の養成と、身体の强剛とは、亦兒童の體育上の慣習（一定の範圍に於て）に依りて、得らるべきものなる事を知りて、日常茲に意を用ゐる事、肝要也、

右の一節、慣習てふ事の、育兒上大切なる故由を述むとして、半ば理論に傾き、思はず冗長と爲りて、去かも意を盡す事十分ならず、宜しく乳養以下の各條と參照し、其の大畧を了得して、筆意の到らぬ處を恕し給はん事を乞ふと云、

折形（一）

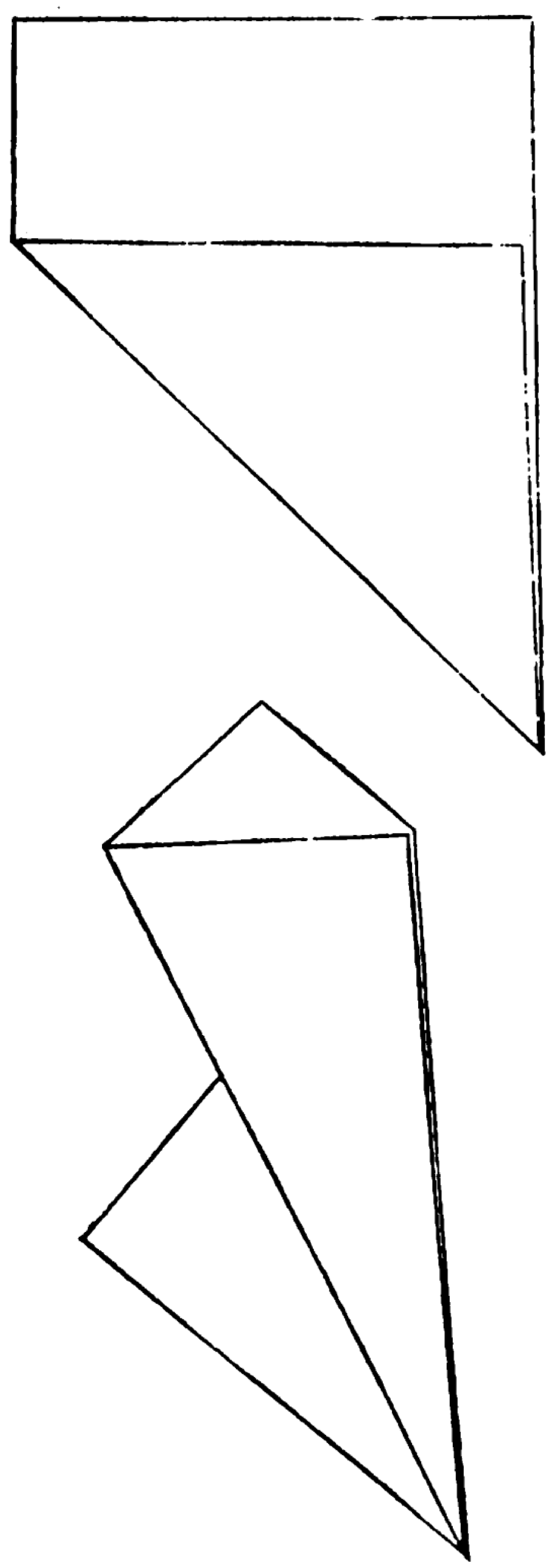
有住齋

前回は、女禮節を演説いたし候に付、此回より、折形を傳授す、此折形は、足利家、禮節を定めたりし時に始まりて、徳川家にも、折衷し、諸儀式に用ゐられしもの也、婦女是を心得る時は、大に調法なる物也、

一　折形は、何によらず、紙二枚にて折るべし、一枚にて折る事なし、

一　紙裁様、裏がねを用ゐる事也、是を不用しては、恰好悪し、、

裏曲の圖

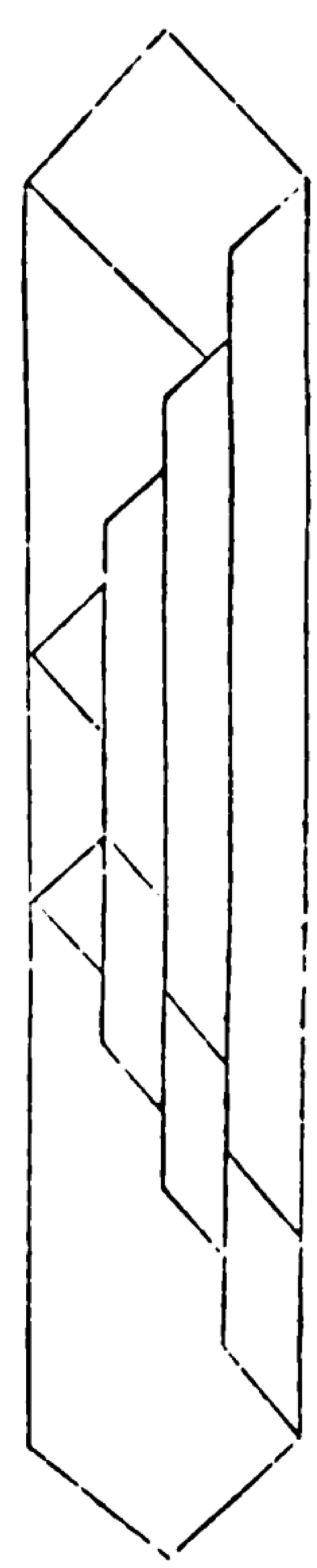


裏曲の傳如此、堅紙を筋違に、二つに折り、又大きなる方を、筋違に折る也、是折物の寸法なり、

一　眞は上輩へ用ゐる、行は同輩へ用ゐる、草は下輩へ用ゐる也、至極の下輩、又

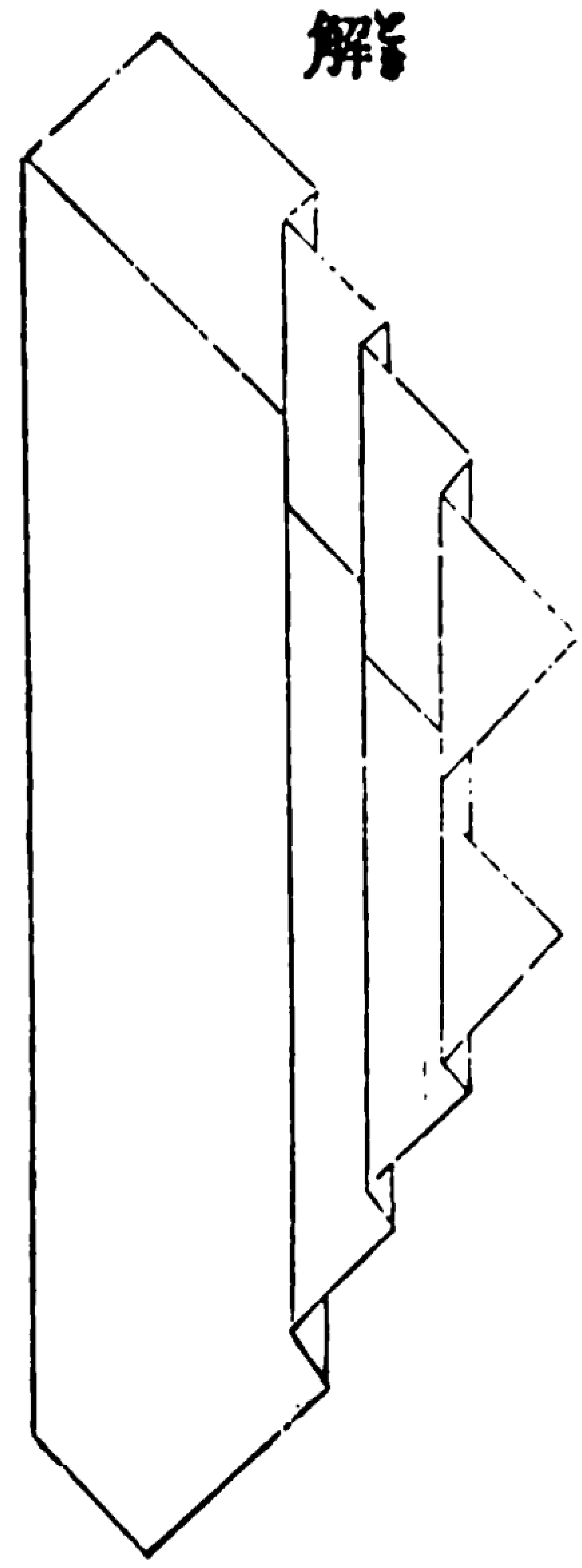
一 家來などへは、髮なしにもするなり、

眞熨斗包



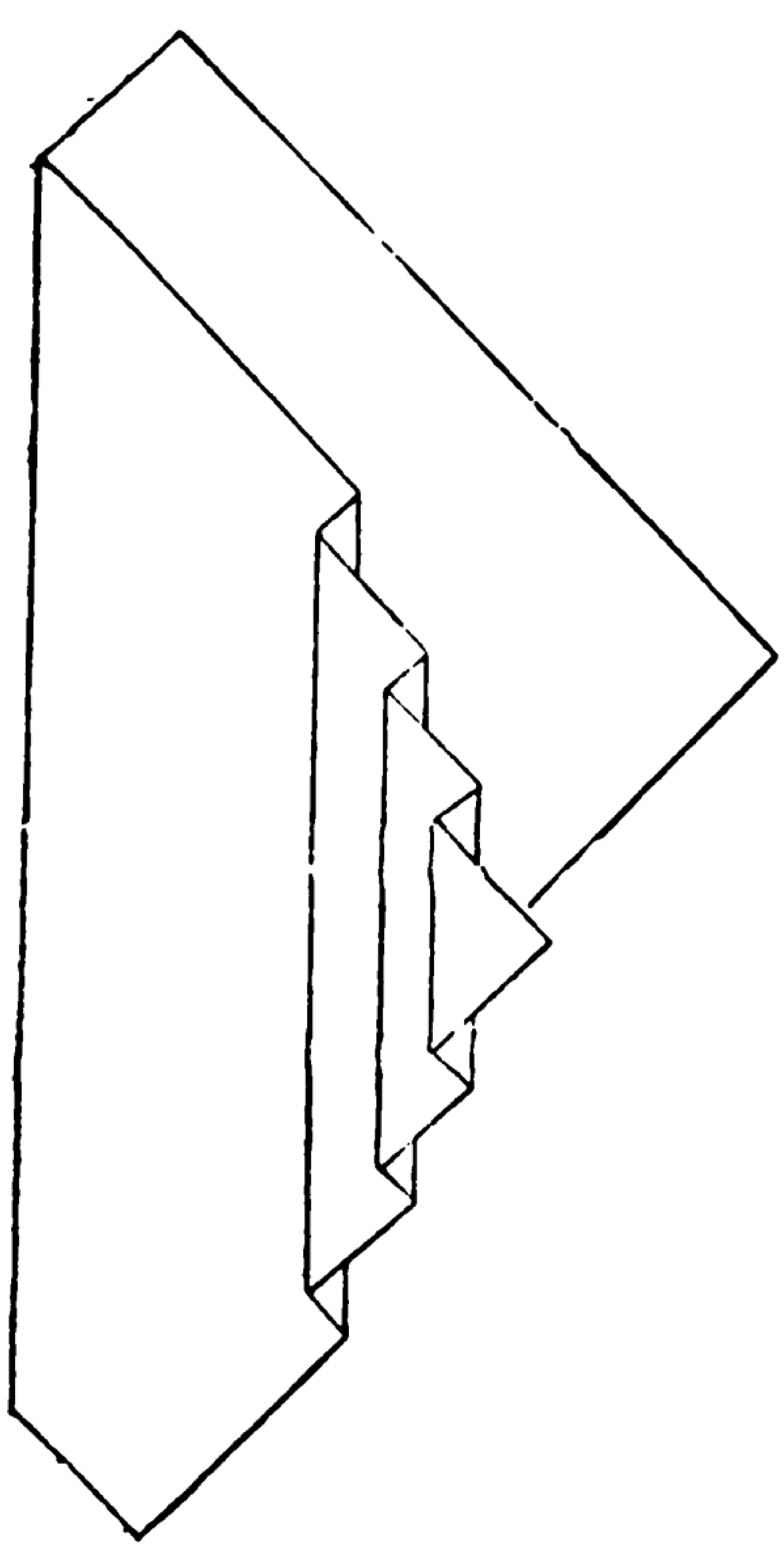
折形に、水引を懸くる事、折形の大小により、二把掛くる事もある也、婚禮の時は、花結、菊結、寳珠結の類、用ゐる事もあり、都て女房向へは、金銀水引を用ゐる、男子へは白くれなゐを用ゐるなり、

解



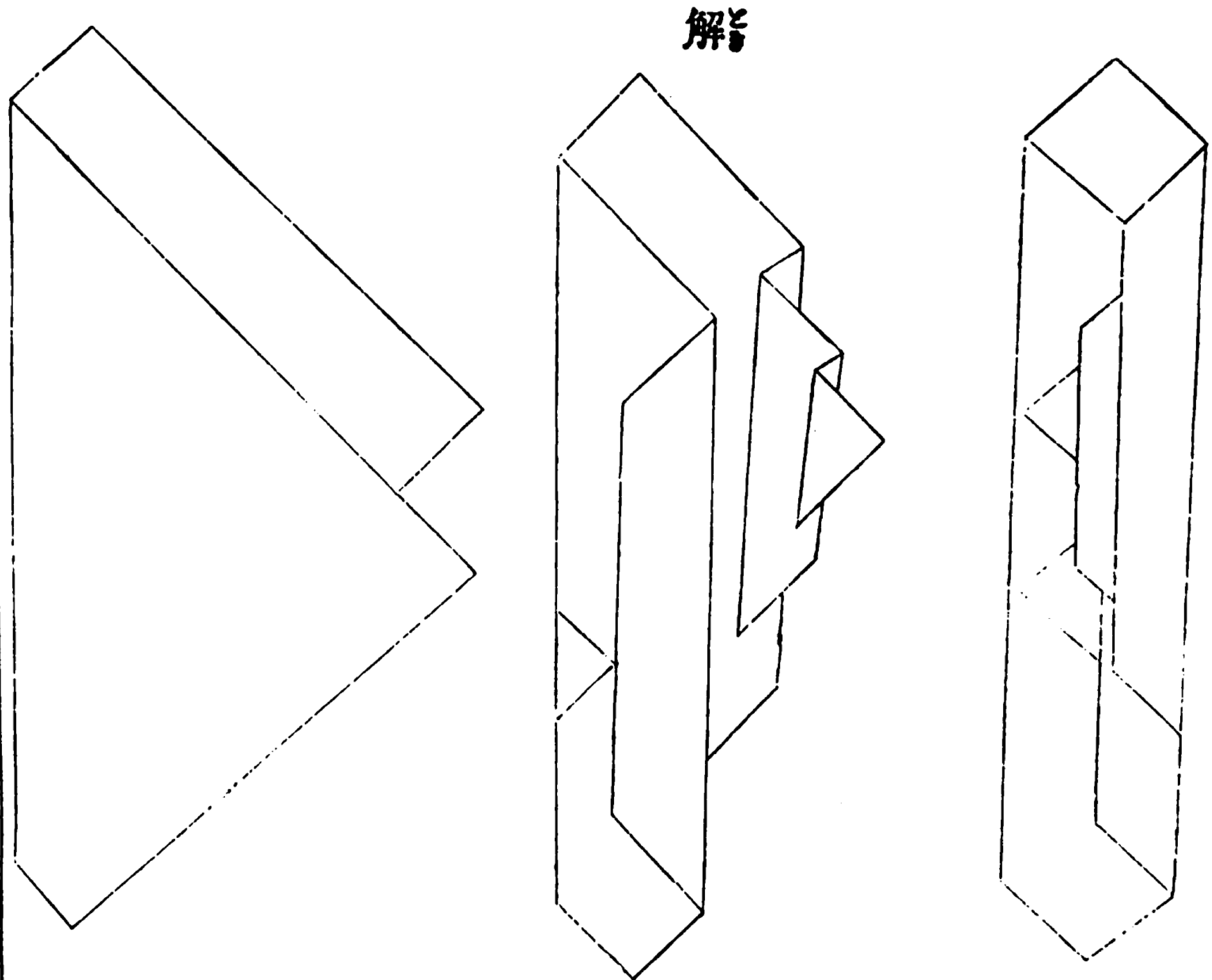
一 紅白なれど、紅を我右よ取り、白は左、金銀なれど、金を右にとり、銀を左、青白なれど、青を右、白は左也、

一 眞行草、熨斗包

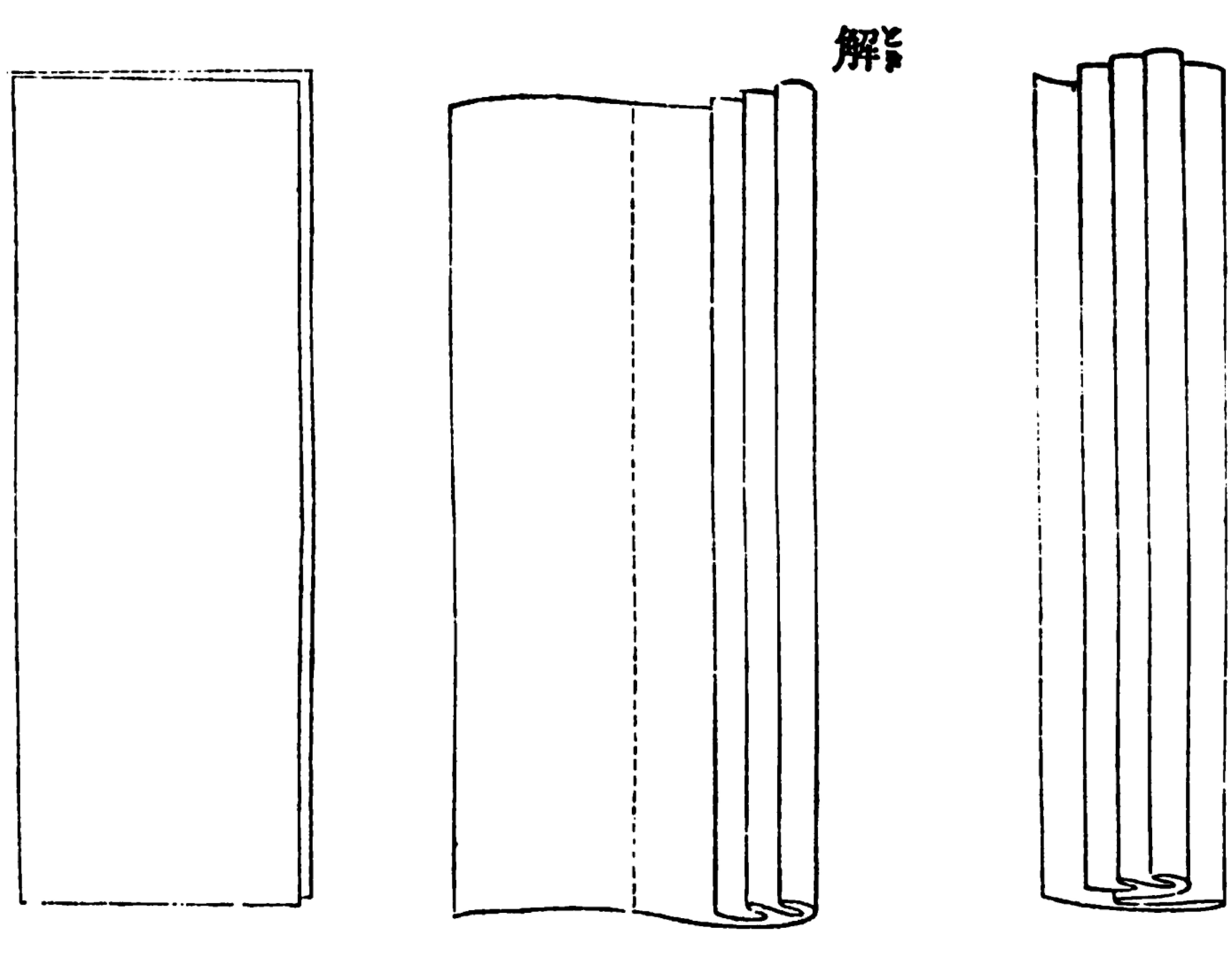


のし鮑は二本、又は五本、折形大なる時は、十本入るゝ事もあり、皆水引を掛け、書付はなし、

行熨斗包



草熨斗包



挿花の事（三）

三重子

みづあげの傳（つゞき）

根笹は、剪口を割りて強く焼き、さて後、鹽のにがり水に浸しおきて、さすべし、

竹は、剪口二三寸ばかり、色のかはるほど、赤銅鍋にて煮あげて、上の節をぬき、水をいれ、葉に鹽水を吹きかくるなり、もしくは白砂糖を水にて解きて、葉ごとにぬるもよし、亦は酒をふきかくるもよし、

椿の花の蕋のなかに、鹽を入れおけば、花おつることなし、

藤は、剪口を幾つにも割り、鐵鎚にて叩きひしぎ、酒を付けて焼くべし、亦花瓶に酒を入れてさすもよし、

木槿は、桔梗の如く強く焼き、鹽菰にて包み、一夜をへて生けるなり、

夏雪は、極めて水あげあしきものなり、夜中汐の滿つる時に剪り、いかにも強く焼き、亦は煮て、水澤山なるものゝ中に浸して、一夜露を受けさせて生くべし、

南天は、幹に鹽をぬり、紙をぬらして巻付け、さて火にてあぶれば、心のまゝよた

めらるゝものなり、尤強くとりあつかふべからず、且節のあるものはよろしからず、

水葵は、灰汁にて煮てさすべし、

萩は、剪口を一寸ばかり、湯につけおきてさし、生けて後にも、湯を吹きかけてよし、

萍蓬草は、夜中汐の満つるとき剪るべし、さて水一升にて、山椒一匁、よき茶十匁を煎じ、水鐵砲にて、茎の中へ四五度もさすべし、水鐵砲のこと下にいふべし、

蓮は、日の出まへか、日の入すぎかに剪り、極上の茶、艾、石菜の根を煎じ、萍蓬草の如く、水鐵砲にて五六度も、茎にさすべし、其後白砂糖を付けて、根元をつよくやき、半時ほど、冷水の中に茎を浸しおきて後にさすべし、尤萍蓬草、蓮共に、全体を短く剪りて、水の多く入る花瓶に、総長の半ばかりも入るれば、花とまき葉とは、大方は、たもつべし、

何にても、節の多き草は、水あげにくきものなり、さるものは、水に入る所の節を、竪に二ところか三ところ、小刀目を入れてさすべし、又は心をもみとはし、もしくは打ちひしぎてもよし、凡て枝葉繁きものは、草木共に水あげがたし、三分一、

或は物によりては、半分ほども取りすてゝよろし、

杜若、花菖蒲、あやめ、檜扇などの類は、花溜に養ひおく間にも注意して、眞直に立ておくべし、置かたによりて、花の首まがりてあらぬさまに、變るものなり、竹などを添へて、それにゆるく結びつけおくもよし、

杜若、花菖蒲、撫子、百合、水仙など、咲きたる花に水をそゝぎかくるを忌む、露を帯びたるは、速かに振りはらひたるがよし、

序に注意すべきことあり、桃の枝には、毛虫の卵あることあり、よく／＼心して取りすつべし、坐敷の中にて成長することあり、其他ものによりては、葉のうち、花のうちに虫の居ることあり、くれ／＼も心づけてとりすつべし、

又ものによりては、毒になるものあり、或は虫の卵などの爲に、知らず／＼毒をうくることもあれど、是もよく／＼心すべきなり、みだりに食器などに挿し、枝葉を口にくはへなど、わすれてもすまじきなり、

看護法捷徑（二十五）

三笠舍主人

（六）火傷

一　火熱、熱湯、蒸氣、其外の熱物、又は腐蝕性の藥の爲めに、受る傷を火傷と云日常最も多き原因は、火燵、手爐、洋燈、及び銕瓶、の轉覆、衣服、蚊帳、の燒焚等とす、

二　火傷も亦其輕重に從て三度に別つ、皮膚赤色と爲りて、灼痛を發するも、未だ水泡を發せざるものを、第一度の火傷と云、最も輕度のもの也、皮膚焮衝を興して、處々剝離し、且水泡を生ずるものを、第二度の火傷と云、皮肉の一部全く燒爛し、黑色炭樣と爲りて、知覺を失ひ、或は甚しく壞爛するもの、之を第三度の火傷と云、最も重度のもの也、

三　第一度の火傷は、速に多量の冷水を灌ぎて、冷水罨法を施すべし、次にオレーフ油、又は石炭酸の稀薄なる溶液を、綿紗等に浸して貼すべし、

第二度の火傷も、亦先冷水を灌ぐを良とす、四肢等にて患部大なれば、其儘水中に沒入するを良とす、水泡は決して剝離すべからず、清淨なる細針等を以て、其

側部を刺して、徐かに所含の水液を漏らし、胞膜は努めて毀損せず、其儘に在して、創面に密着せしむべし、

第三度のものも、最初の所置は大抵第二度のものと異ならず、

四　傷處は何れの病に論なく、空氣に觸れしむるは惡しゝ、故に冷して後は、オレーフ油、又は脂肪類を塗り、或は麵粉、又は白粉を撒布し、更に壓定巾等を以て輕く包むべし、其外近傍に藥舖あらば、取敢へず、サリシール酸軟膏、又は石炭酸軟膏を購ひて、塗敷するを良とす、

五　腐蝕藥に依りて火傷を受たる時は、速に猶殘留する藥物を無害物と爲すべし、則數多の酸類に因るものは、先づ木炭、石鹸、又は白堊、曹達、等を撒布し、或は乳汁を注ぐべし、又強力のアルカリー、例之ば、苛性加里、等に因るものは、稀酢を灌ぎ、次に淸水にて洗ふべし、

六　誤て衣服に火の附きたる時は、先、毛布、蒲團、若くは傍者の上衣を以て、傷者を包み、地上に轉輾せしめて、火焰を滅せしむべし、若此等の物なき時は、直に傷者をして、地上に轉輾せしむべし、狼狽動搖する時は、火勢をして益熾ならしむ

るもの也、
七火傷に罹りたるものは、必ず其部の衣服を除くべし、之を除くには、必ず剪刀を以て截開くべし、衣服の、皮膚若くは水泡の上に附着して、離れざる處は、決して剝すべからず、其周圍を切り、附着したる衣服の一片は、其儘に皮上に留め置き、爾後、三項に揭げし處置を爲すべし、
八熱物を飲食して、口中に火傷を興したる時は、直に冷水を含み、頻りに嗽ぐべし、又炭火爆發して眼中に入り、火傷を蒙りたる時は、直に冷水にて洗ひ、次て冷水罨法を施すべし、決して摩擦すべからず、
九以上は總て一時の處置に止る、其他は速よ醫の手當を受くべし、

漬物鹽加減（五）

駒込烹軒

漬蕨

わらびの和き所をかりをえらみて、塩に灰を合はせて漬けるなり、遣ふ四五日前より、よびわくを入れて、水に浸しおき、熱湯をかけて庖丁す、

山葵粕漬

わさびを、短册にうちて、塩にて押し、翌日、水を切りて、粕につけ、壷に詰めて、目バりをして貯ふ、

薤三杯漬

らつきやう一斗、塩二升、生姜の葉大分入れて、塩おしにして、壓をかけて、水十分にあがり、三十日ほど立ちて、其の水をこぼし、まむらく、水をかわかして、砂糖蜜に漬ける、是も、三十日すぐれどよし　右の酸味は、持前の酸味なれど、若、酸味薄きときは、酢少々入るゝもよし、

三葉溜漬

みつむせりの白きところバかり揃へて、竹の皮を、ほろくさきてくゝり、根と葉を去り、水氣を、とくとかわかして、味噌の溜を、すいのうにてこして、其の中に漬けるなり、二夜バかりにて、漬加減なり、

葉附小大根三杯漬

小だいこん、尤ちひさきを揃へ、莖一寸バかり殘しおき、葉先を切り、一時ほど、

日にあてゝ、直に三杯酢に漬けるなり、是を、洗髪といふところもあり、

土筆粕漬

つくしの穗むかりをとり、能く洗ひ、水を切りて、直に粕につける、遣ふ時、粕を洗ひ、花がつをなどかけて、猪口に遣ふ、風味至てよし、

家多良漬

ひしほの鹽を、からめにつくりおき、瓜、茄子、たうがらしなどを刻み込み、漬けるなり、澤庵大根の、味少しかはりたるにても苦しからず、段々切りてつけ込むなり、紫蘇の實、生姜もよし、瓜、茄子、甘鹽に押して、水をきりて漬けるは、ことさらによし、

精舍納豆漬

納豆には、瓜、茄子、丸にて、一鹽押して、水氣をとりて漬込むがよし、一日はしてつければ、味格別なれど、急にはつきがたし、是とても、生姜、たうがらし、辛皮など入るゝもあれば、時の宜しきに從ふべし、

枝豆鹽漬

ゐだまめのさやの青きをえらび、もぎて、湯をくゞらせ、中鹽にして、燒明礬をすこし加へ、かるく押をして、たくはへ置き、つかふ時、一夜鹽出してゆでれば、さやも青くして、生の枝豆のごとし、

鹽松茸

尋常の鹽松茸は、鹽水にてゆで、さまして、其の鹽水にて、樽詰にするゆゑ、匂もなく、味もなし、珍客をもてなすには、是に異なり、松茸のかさのつぼみむかりをえらみ、蒸籠に入れ、青松葉をたきてむし、とくとさまし、松脂を細末にして、六十匁、鹽二升にませて、松茸一貫目餘を漬置くなり、常の如く、鹽出して遣ふに、風味も、殊更よく、匂も、生にかはることなし、又初たけ、松露も、かくのごとくして漬置けば、風味よし、

漬昆布

松前昆布を撰び、一夜水にひたし置き、よく砂を洗ひ、日に乾かして、溜りがちなる味噌に漬けるなり、又粕につけるも、同じ事なり、昆布の兩方のふちをたち切り、正味のところばかり、手比に庖丁して、重ねて漬けるなり、

學園

本邦女子文學略傳（第十）

目黒和三郎

小大君

重明親王の女にて、歌道にも勝れて、當時にもてはやされぬ、

出羽辨

出羽守秀信の女なるを以て、出羽辨といへり、歌を以て名あり、

小辨

越前守懷尹の女なり、出羽辨など丶比しく稱せられて、歌道にも暗からず、

馬内侍

左馬頭時明の女なり、よりて、馬内侍といへり、漢籍に渉獵し、歌道に秀で、一條天皇の中宮定子に仕へて、名ある女房なり、

新宰相

參議廣業の女、和歌を巧にす、

江侍從

大江匡衡の女なり、父の子たるに耻ぢず、漢籍にもわたり、又和歌にも妙なり、一說に、匡衡の子にはあらで、朝綱の子なりといへり、孰か是なる、識者の判を待つ、

兵衛內侍

信濃守隆信の女、和歌を以て名あり、

中將

道雅の女なり、又和歌を以て名あり、

以上は、皆一條天皇の御代の官女にて、或は、中宮定子の方、或は、上東門院の方に宮仕して、淸紫の兩女につぎて、當時に名高かりし女房なり、天皇の、人を得たる事は、前聖に耻ぢずとのたまひたる、男のみならで、女にわたりて、かばかり、名家のいでたるは、後の後まで、あり得がたき事ならん、但、以上の人々の事實の、物に見えたるもの少なく、略傳にも足らぬさまなるは、おのが寡聞の罪なれば、見ん人、その心して、博洽の識者に問ひねかし、

さて、一條天皇の次々、源平時代に至るまでも、才女には乏しからねど、猶、彼の御世の如くにはあらざりけり、三條院の女房、女藏人、左近、小一條院の女房、中務(因幡守致貞の女)など、世には、歌人ともてはやされて、有名にはあれども、傳說を得ねば、口惜しき事なりけり、さて、又當時に、伊勢太輔の女にて、名高き歌よみありけり、神祇伯顯仲を生みしを以て、たゞ伯母とぞ稱へたる、宇治拾遺に、「伯母とて、世にめでたき歌よみなり」とあり、されど、これ又、傳說の、物に見えねば、せん方なし、

梅壺女御

名は生子、關白藤原敎通の長女なり、長曆三年、後朱雀天皇の女御となり、寵愛淺からず、后の宮とならんとして果さず、治曆四年に薨ず、書をよくし、殊に和歌に勝れたり、世に梅壺女御、また弘徽殿女御と稱するは、即この生子のことなり、

相模

源賴光の女なり、後冷泉天皇の時、入道一品の宮の女房にて、名を乙侍從といへり、相模守公資と、深く語らひて、終にその妻となれりしを以て、夫の受領を直に、相

摸と名付けしとぞ、相模の、歌人として名高かりける事は、後ながら、順徳院の御詞に、「女の歌にては、赤染右衛門、紫式部、相模などは、昔にも耻ぢぬ歌人なり、」とのたまひたるにても知らるべし、又十訓抄に、

大江公資、大外記を所望しける時、僉議ありて、拜任よろしかるべきよし、諸卿定め申されけるに、彼おとゞの意見に云、（今云彼おとゞとは、小野宮右大臣實資公をさす、）公資は、相模を懷抱して、秀歌案ぜんほどに、公事を闕如云々、

とあるも、相模の有名なる歌人なりし事は知り得べきなり、後拾遺集、「うらみわびほさぬ袖だに」の歌も、永承六年五月五日、殿上歌合にて、右近少將經俊朝臣に勝ちたる歌なり、一說に、相模は、大江公資の女にて、從三位濟政の室となれりといへど、如何にや、猶識者に問ふべし、世に、相摸のゆづり言葉といへることをいへども、如何なることとか、おのれ、未だ知り得ねど、せんなし、これ又識者に問ふべくなん、

（正誤）前號儀同三司の結文、遺憾なりしは、なりかしの誤、又伊勢大輔の添がなは、いせのたいふの誤、）

日本文典（つゞき）

杉谷正隆

(五) 轉用格

轉用格とは、一つの活の作用詞にして、他の活にうつりてはたらき、其の意を變ずるを云ふ、例へば、咲かん、咲き、咲く、咲く、咲けと云ふ作用詞は、四段活なれども、其の第一段、即將然格の咲かより、下二段活のせ、せ、す、する、すれと云ふ活にはたらきて、咲かせ、咲かせ、咲かす、咲かする、咲かすれとなるが如し、

轉用格に、左の二種あり、

第一　下二段活の、佐行に轉用する格、

第二　下二段活の、良行に轉用する格、

第一、下二段活の、佐行に轉用するものは、作用詞、及、形容詞の、第一段將然格よりするなり、而して、是に、左の二種あり、

(一)	せ	せ	す	する	すれ
(二)	させ	させ	さす	さする	さすれ

(一)に轉用する所の作用詞は、四段活、及、奈行變格にはたらくことゞなり、例へバ、行かん、行き、行く、行く、行けと活く詞の、第一段將然格の行かより、せ、せ、す、する、すれに轉じて、行かせ、行かせ、行かす、行かする、行かすれとはたらくが如し、之を、圖に示めす時は、左の如し、

行か 押さ 打た 往な 逢は 住ま 釣ら	せ	せ	す	する	すれ

但、奈行變格は、右の圖にあげたる往なと同じけれバ略す、

又、此の格には、形容詞四段活一種よりうつりて、活くことあり、例へバ、有らん、有り、有り、有る、有れと活くことゝその、第一段將然格より、有らせ、有らせ、有

らす、有らする、有らすれとはたらくが如し、之を、圖に示せバ、左の如し、

有ら
居ら
侍ら } せ　せ　す　する　すれ

但、形容詞の、久、志、幾活は、一たび、良行轉用格に轉用して、夫より、再、こゝに轉用するなり、猶くはしきことは、下の形容詞のところと、參照して知るべし、

(二)に轉用する處の作用詞は、上一段活、下一段活、上二段活、下二段活、加行變格、佐行變格の六に、はたらくことゝなり、

上一段活は、例へバ、着、着、着る、着る、着れとはたらくことゝの、第一段將然格の着より、させ、させ、さす、さする、さすれにうつりて、着させ、着させ、着さす、着さする、着さすれとはたらくが如し、之を、圖に示せバ、左の如し、

着
煮

干	見	射	居
させ	させ	さす	さする	さすれ

下一段活は、上にも云へる如く、今は、普通に用ゐるときは、大方、他の活にはたらかして、此の活としては用ゐざれバ、こゝには畧す、

漫錄

井伊氏夫人所咏長歌一首

大老井伊氏．舊幕府の末にわたりて、水戸浪士の爲に、櫻田の變にあひて　紅の雪と消えにし慘狀は、天下人々の知る處なれど、今さらいふべきにあらねど、其夫人氏の變に處して、悲しみ憤りつる時に、長刀の鞘おしはづして、寇どもに立むかはむと思へる志操の烈しき、又その夫なる人の、みうせにしありさまを見るに堪へずして、紐刀ぬきはなち、自ら吭ぶゑさして、うせなむとせられたる雄々しさは、手よわき

女のわざとも思はれぬを、世にもてはやす人もなきは、いかにぞや、此頃紅雪雜記といふ書を閲して、此歌をよむに、詞うるはしくとゝのへりとにはあらねど、自らなる貞節の心あらはれて、人をして感愴にたへざらしむるは、さすがに封建時代、たけき武士どもをあともふ大名の、夫人なればにやあるらしと、一言そふるものは、

水戸の僻地にすむ栗里主人になむ、

何がし中將、北の方の、御櫛匣のうちに殘し置給ふ御歌とかや、

さゞ浪の志賀津の浦の　大淀のよどむことなき
大御代に我やの家は　昔より其名も高き
公の御世のつぎ〳〵　まつり事聞えあげつゝ
家の風ふかせ繼つゝ　世の人も仰せかしこみ
何事も伊吹の山の　いはで唯ありける物を
いかさまになり行末の　此春の彌生の三日の
朝霞それならなくに　花とのみちるやみ雪の
ゆきもよふ西の大城に　打鳴す時のつゞみの
音信にいそしきかもよ　けふもなほ君の仕への
道すがら北ふきいでぬ　櫻田の御門のわたり
誰しかも怪しのをのこ　右左立かさなりて
わが夫の籠に打むかひ　火の器とゞろ打かけ
腰かたなぬきに拔もて　立よるをつどふ臣等が
こは如何いかにと計り　おのがじゝ拔合せむの
其隙もあらざりけるを　彼方には待にまちえて
打かゝる劍も太のを　太むらくは戰ひつれて
此方にも皆ぬきつれて　ふる雪と共に乱れて
思はずの事のかなしさ　仇をらの思ふまに〳〵

君はしもあらせ給ふと
家のうち屋の内ゆすり
立さわぎひゞき渡りぬ
事いかにこはの聞し
常陸帯のかことがま敷
怨よりかゝりしことも
玉襷たゆたき太刀に
引むすび長柄の刀
手握りて走り出れど
傍にありあふ人ら
袖をとり裳の裾をさへ
あはれ君道理ながら
夏虫の火に入るが如
石をおひ淵行がごと
かく計り八十の伴の男
あるからは去べしも（とカ）
山河のせかるゝはしに
ちり〳〵に歸る臣等は
秋風に落るこの葉の
すり衣わけにそまりて
君が籠をかきいれに鬼
我つまはいかにや〳〵
み命はいかに〳〵と
せきかへる涙の瀧の
糸すだれ明てくやしき
浦島が恨みぞいとゞ
ます鏡掛て祈りし
わだし身の守り刀も
うらめしく今は限りと
ぬき放つ玉手とらへて
前うしろ臣らつどひて
又更にいさめ申さく
かゝりけるゆゝしき極
若君はまだはつ草の
うら萠に道のくま〳〵
わくまでに生立まさず
其中に君しあらずは
犬上の床の山邊は
常やみに成なんものと
かにかくに漢に日本に
例さへ引てかこちて
けふよりは掛留られし
うき身何せむ

三卿三説（つゞき）

松野操雄

一京極入道中納言が、鎌倉右大臣家へ、おくられ侍る一巻の中に、やまと歌の道は、とはくもとめ、ひろくきく道にあらずと侍る事、至要侍に

る、まことに、月氏、漢朝のことわざを、よむべきにあらず、廣學多聞を事とすべきにもあらず、たゞ、やまとことばにて、みる物、きくものにつけて、いひ出だすばかりなり、されど、經論の文をもとめ、ひろく、詩賦の詞をうつすべきにあらず、萬葉集の歌、日本紀のことどなどを、もとめ聞きてよむだにも、いかゞとこそ承り侍れ、されど、顯昭が、いなおほせ鳥の事、くれ〴〵と釋したるをば、京極入道中納言は、此のこと、いはでも有りなん、金翅鳥、伽陵頻などいふ鳥も、有りとばかりきゝて、さてありなんかし、しりたるものも、いなおほせ鳥は、からずなりけりとも、すゝめ成りけりとも、よまぬ上は、たゞ、しらずよみに、よみたりとも、何のくるしみかあらん、かやうに申せど、物もおぼえぬ山寺法師などは、當家は、何もしらぬ家ぞと申したり、をかしくてそとぞ、仰せられし、

一餘情の事

上手になりぬれど、餘情のあるなり、餘情と申すは、こと葉の外に、多くの心あるなり、假令、故大納言入道殿爲氏歌、江上春望と申す題にて、

　人とはゞみずとやいはむ玉津しま
　　かすむ入江のはるのあけぼの

と侍るやうなり、玉津嶋のありさまを、こまかに詠じたらんよりも、彼の浦の景氣、眼にうかびて、おほくの風情こもりて聞こゆるなり、大かた、歌の徳は、僅に卅一字の中に、おほくの心を、

よみあらはすを徳とす、惡歌は、卅一字の中にだにも、その心たらずして、詞のあまるなり、重言など、心うきものなり「夕ざれば門田のいなばおとづれて「夕ざれば野べの秋風身にしみて「まの丶入江のはまかぜになどは、みな、餘情ある歌どもなり、歌のおもてには、さしたる曲節もみえねども、詠出だせば、あはれもふかく、さびしさもまさる歌共なり、又かゝらねども、よき歌は、よみ出だしたる心が、やがて、身にしみて、げに、さもとおぼゆるもあり、貫之「いもがりゆけば冬のよ、とよめる歌をきけば、さびしくも、さむくもおぼゆるとなり、

一題をよく心得よと申す事、

清輔顯臣再入道中納言同心也、假令、山霞、河月、かやうの題は、山と霞を、たしかに、上下の句に、わかちよむべし、但、山のはかすむなど丶て、よろしき歌いでくらんには、はゞかるべからず、河月、なぞらへて知るべし、曉時雨、夕落葉などあらん題をば、曉とよめるは、よろしからず、いかにも、寐覺、よこ雲、有明、鳥のねなど、めぐらし可詠之、夕字、又、入相の鐘、雲のはたてなどよむべし、自餘、准じて可知之、又、河上月、野外雪なども、上外の字よむべからず、よまんとすれば、歌よろしからず、野徑、山路などは、さして、路とはよまねども、行歩のやうをだにもよめば、みちは可備也、大方、四季の景物は、皆、季にしたがひてみゆるなり　春は雪消、氷とけて、世

のけしき、うら〳〵となりて、人のさまも、はこらしくみゆ、是、則、景色によるなり、題も、亦しかるべし、立春、若菜、鶯、花、款冬、藤、いづれも〳〵、心すごく、さびしき躰に侍らず、夏は、花落ち、鳥かへりて、四方の木立、しげしげとして、涼しきさまにはみえず、更衣、卯花、郭公、五月雨、夕立、蟬、蓮、納涼、いづれも、幽玄には見え侍らず、秋は、荻風、萩露といふより、いづれか、さびしく、かなしからぬ題侍る、愁の字をもて、秋の心と作るにて、思ひしるべし、冬は、虫の音、草の色かれはて、、露こほり、霜むすびて、冬ごもりたるさま、さびしく、かなしからずといふことなし、後鳥羽院の御時、三躰歌にて心得べし、されバ、此の時、歌よみおほかりしかども、よむ人、わづかに十人計りにや、又、戀、雜の歌は、戀ひしく、わりなく、よみぬれバ、さりぬべき歌は、いでき侍るなり、旅、述懐、准可知之、ただ四季の歌が大事にてあるなり、さのみ、くどく、よむべからず、おほきに、たけたかく、幽玄によむべし、

一本歌の事

いかにも、本歌の文字を、おき所をたがふべし、假令バ、はじめの五文字をば、第三の句におくべし、もし、おかれずば、五字に、いま二字をくはへて、七字になして、第二句にも、第四五句にも、おきかふべし、本歌の文字、三句にわたりては、更にとるべからず、又、とるべ

き句などのなくて、しかも、とりぬべからん、万葉集などの歌をバ、心をもとるなり、

人とはゞみずとやいはん玉津しま
かすむ入江のはるのあけぼの

と侍るは、万葉集歌に、

玉津島よく見ていませあをによし
ならなる人の待とはゞいかに

いふ歌なり、玉津島の一句のほかは、よろしき句侍らぬほどに、かやうにとられ侍るにや、大かた、及びがたきさまなり、又、人の いたく、しらぬ歌、とるべからず、作者、よく、とりたる心ちなれども、人しらねど無念なり、又、あながちに、本歌とることは、よろしからぬ事なり、又、近代の人の歌、とるべからず、冥加なき事なり、大かた、歌は、我が國の風俗、神代のことわざなれバ、ことに、神道のまもりたまふ道なり、和歌三首已上、披講の所ゝは、住吉、玉津島明神、影向したまふ故に、披講のときは、各、席を退くなり、道をたゞしくて、偏執有るまじきなり、邪執なるが冥加なき事なり、よくよく思ひはからふべし、是、則、おろかなる意樂にあらず、おのづから、承り侍りし事を、九牛が一毛、しるしつくる所也、寫本云

于時嘉暦元年六月十八日、染紫毫、書白麻畢、

貞享元年南呂上旬、以善本、獨校合訖、

主一堂宗川在判

嫁のしるべ（つゞき）

故人　大塚退野

君子の父母に奉りやうの事

女は、生れて、必ず、其父母の家を離れて、人の家にゆきて、身を終るものなれど、夫の父母は、即ち我父母なり、このゆゑに、いにしへ、聖人、喪の服を定めたまふに、父母は、三年服なり、女は、人よゆきては、夫の父母が、我父母なるによりて、三年の服を受くるなり、さるにより、本生の父母には、三年を減して、むかはりまで、期の服を受くるなり、此の如く、定めおきたまふにて、よくしるべし、さるによりて、本生の父母の如く、孝行の實をつくすべし、孝行の品、多しといへども、つゞめていへど、よくいとをしむと、能くうやまふとのふたことにとゞまれり、この心をもとゝして、万事仰せのまゝに從ふ時は、必ず喜びたまふべし、父母喜びたまふに至りて、孝行のしるしとすれバ、御心にかなはぬ事あらど、我身に幾度もかへりみて、孝行の足らぬを責むべし、順逆ともに、つかふまつりやう、姫かゞみ、鏡草にくはし、

身の守りやうの事

女は、一度人に嫁して、夫婦となりては、異人に見えぬこと、身を終るまでの守りなり、このまもりの堅固なるを、貞女といふ、もし變に逢うて、死すといへども、このまもりをかへざるを、烈女といふ、夫死してだに、堅くまもる道なるに、存生の中に、うしろ暗き心あるは、畜生の業なり、

このゆゑに、かりにも、人の、あやしみをなすべきやうの事わざをせ、常に、心にかけて、つゝしみさけて、人の疑を受けぬやうにすべし、

身のたしなみやうの事

身のたしなみは、身の守りに比ぶれバ、輕き末の事なりといへども、是等のかろき所に、心をつけて、つとむる時は、おのづから、心も直く、身もすぐよかなり、其事あまたありといへども、さしあたり、おもき事ども、こゝにしるしぬ、この外は、みづから、はからひつとむべし、

朝寢して、寢顔を、人に見すべからず、化粧し、髮ゆふこと、一日も怠るべからず、凡、化粧せぬは、病と、おもき喪ある時となり、その外に、君子、他國などに逗留の間などは、せぬよしなり、喪は、大方、しやうじんの內、せぬがよきなり、是等は、舅姑の仰あらバ、それに從ふべし、女の化粧し、かねつくる事、人に、よく見られんとのためにはあらず、夫を敬ひ、身をつゝしむわびごとなり、世の末になりては、だてにする如く心得て、家に居る時は、大やうにて、門より外へ出づる時、一きりと化粧し、髮かたちまでも、念を入れて、かいつくろふ事こそ、あさましきわざなれ、心あらん人は、夫をかろしめる女なりとこそ、いふべけれ、外に出づるとも、足のつめ、あかなきやうにすべし、見えぬ所ゆゑ、おろそかになりやすきものなり、すべて、見えぬ所へ、心をつくる事、よき人のわざなり、

古は、男女の別を正しからしめんと、男女、手づから、手わたしに、物を渡さぬ法なり、今とても、何とぞ、手わたしにせぬやうにありたき事なり、下に置きてか、何ぞに載せて、うけわたしすべし、是も、舅姑夫の外の人に對しての事なり、祭祀や、喪や、火事などの時は、きらひなかるべし、是も、舅姑の仰あらば、それに從ふべし、

今の世、酒の座にて、男女打まじり、老若となく、さかづき事するならひなり、是等も、世のならはしにて、舅姑の御差圖ならば、いなみ申さずともよろし、さなくば、必ず、外の男子と、盃事すべからず、隨分、懇に、斷を申すべし、殊に、出家、醫者、座頭などには、とりわけ、盃さすべからず、

召仕の男女あはれみやうの事

召仕のものは、よろづに、たらぬ事あるものなり、必ず、そのたらぬ心を責むべからず、教へて、がてんして、あしき事は、あらたむるやうにすべし、もし、また、いひつけなど、聞かぬ事ありとも、必ず、怒るべからず、唯、人の上となりては、あはれみめぐむ心を本とすべし、この心まことあらば、下の、我にそむく事なきものなるべし、すべて、この理、人たるもの丶、志りて、かへりみるべき事なり、歌に、

己がよきに人の惡きがあらばこそ
人のわろきが我がわろきなれ

（をはり）

門田のさなへ

こは、伴蒿蹊翁（近江八幡の人、京都に住めり、文化三年、年六十七にて死ぬ）が、專ら童幼を敎へ諭さんとて、古くより、もてはやされたる歌どもをかゝげて、これに解說を施し、なほ、翁の意見をも加へられたる、いともめでたきものなれば、こゝに抄錄しつ、

秋里豊成

難波津、淺香山のふた歌は、うたの父母のやうにて、手習ふ人のはじめにもしけると、古今集の序にしるされたり、今も　日向わたりにては、手習ふ人に、まづ、此ふた歌を敎ふとなん、片田舍に、古ぶりの殘るも、たふときことなり、されば、こゝにも、さきに、これを擧ぐ、

難波津に、さくやこの花、冬ごもり、今をはるべと、さくやこの花、

この歌は、大さゝぎの尊の、（仁德天皇の御事）御位につかせ給はんことをすゝめ奉りて、百濟の博士王仁といふ人の、よめるなりといひ傳へたり、其もとは、さもあらばあれ、今、更に、わらはべのためにいはば、父母の膝のもとをはなれて、やう〳〵、おとなしくなりぬるは、冬ごもりせしこの花の、春にあへる如し、女子は、夫の家にかしづく頃をいふべし、凡、幼き時は、いときなき時の心ばへあり、おとなになりては、又、おとなになりての道あり、既に、よめとり、夫の家に行くに及びては、おとなの道に從ひ、家を治むることを心とすべし、人の世をふるに、時と處と位といふ事あり

て、時とは、たとへば、春は、春のありさま、秋は、秋のありさまありて、いかにうつくしき火桶も、夏はうるさし、いとめでたき扇も、冬は手ならすべからざる如し、處とは、男は、をとこ、女は、女の處あり、おほぢは、山に柴刈、おうなは、川に物洗ふと、をさな子の物語にいへるが如し、位とは、富めれば、とめるやう、まどしけれどまどしきやう、貴き、賤しき、各々が位あり、思ふこと、其位より出でずと、古の聖も、のたまへる如し、時、處、位をつゝめて、たゞ、わが時々、程々を守るをいふべし、こゝに、殊更、女のためにいはゞ、家を治むるといへどとて、男の如く、專にするにあらず、内を守りて、縫針のこと、喰ものゝことをつかさどり、家に費なきやうに、こまやかに、心をもちゐるを云ふ、是、則、夫を輔けて、家を治むるなり、夫をさし置きて、已かしこげに、事をとり計らふを、家を治むるとはいはず、

淺香山、かげさへ見ゆる、山の井の、あさきこゝろを、わが思はなくに、

これは、万葉集の歌にて、葛城王なる人、陸奥に使し給へる時、國の司のあへしらひ、おろそかなりければ、王の意悦びず、怒の色、面に顯れけれど、前の釆女なりし女、左の手に、盃をさゝげ、右の手に、水をもち、王の膝にうちて、此歌をながめ出だしければ、王の意解けて、終日、酒くみ樂しび給ひしといへり、淺香山は、みちのくにある山なれば、所から淺しといはん序におけ

り、歌の意は、淺き心を、われは思はぬものをと、いへる下句計りなり、これをもて、教にとらんに、とかくにつけて、淺き心より、目の前の欲にほだされて、後を計らぬから、不仁不義を行ひて、身をうしなひ、家を亡ぼすにもおよぶ、財欲、色欲、みな是なり、女は、まして、淺々しき心より、かりそめの事にも悦び、又、腹だちて、かへりみる所なく、さしもなき事をも、かくすかと思へど、又、いふまじきことをも、とはずがたりす、神佛を信じて、何くれと祈るかとおもへば、驗なきときは、大きに恨む、およそ、女のさがなきさまは、ふるき文どもにも、つばらにしるされたれば、今更にいはず、皆、あさき心よりおこれり、男も、女も、此下句のこゝろを、よく〳〵味ひて、淺き意をかへりみ愼しむべし、

ことしゆく、にひさきもりが、麻衣、かたのまよひは、誰かとりみん、

これは、万葉集中より出で、さきもりとて、筑紫太宰府の守に行くものゝ母のよめるなり、昔は、異國のふせぎに、太宰府といふものを置かれて、帥といふを頭にして、大貳、少貳など、皆、文武の人を撰みてつかはされ、其下々にも、官人多し、防人は人夫にて、東の國々の賤しきものをあてられて、年々に、入り交り〳〵ゆきたるなり、それが中に、歌よむ人もありて、詞は、其國ぶりなれど、意は、哀なるものも多し、殊に、此歌は、出でたつ子を送りて、其母のよめる、意も詞もたらひて、千餘歳のいま、人をして泣かしむ、こと

し、はじめて、ゆくさきもりが、麻衣の肩のやぶれは、まよひさはやぶれなりたれが、とりてつくろはんと、かなしめるなり、

たらちねの、おやの守と、あひそふる、心ばかりは、關なとゞめそ、

こは、古今集の歌にて、小野の千古が、みちのくの介に罷りける時によめると、詞書あり、たらちねは、おやとも、母ともいふ枕言にて、たらちねと計りにても、母の事なり、身こそかなはね、行く人にたちそふ心計りは、關も留むる事なかれとなり、都の人も、あづまの人も、子を思ふ心はかはらず、昔も今もひとし、人の子たる人、よく思はざらんや、この心をつゞめては、後撰集に、兼輔の歌、

人の親の、心はやみに、あらねども、子を思ふ道に、まどひぬる哉、

親は、子ゆゑの闇に迷ふなるを、子は、其心もしらで、獨、おとなしくなりたるやうに思ひて、仕をおろそかにする罪、誰にか報い侍らん、總て、其親に不孝なる人は、己が子も、また不孝なるべし、そも／＼、三とせ、親の懷を離れず、はへばたて、たてばあゆめと、引きたつるやうにおもひ、やう／＼、おとなしくなり行くに從ひて、身にあやまちはせずや、心地惡しうはおはせずやと、父母の心づかひは、いか計りぞや、天の高きが如く、極まりなき親の惠を、ちゞのひとつも思ひはからず、身をいたづらになすは、悲しからずや、さて、これまでは、人の子のためにいふ、又、

子もたる人のためよいはゞ、心のやみはさることとなれど、子を育つるに道あるべし、舐犢の愛とて、親牛の、子牛をねぶりて、よろこぶ如く、唯、愛する計りにて、教なければ、其愛になれあまへて、身をたつることをしらず、いつも、かゝるものぞと計り心得て、男も女も、世のすたれものと成り行くも多き事なり、分きて、女の子は、幾程なく、人の家に往くものなれば、愛に過ぎたる子は、舅姑に仕ふる道をしらず、追出さるゝぞかし、女は、人の家に行きて、再歸る道はなし、されば、夫の家にゆくを、歸るといふ、世の定めなきならひ、止む事を得ずして、親のもとへ歸る事なきにはあらねど、それは變なり、常をもていふべし、或は、女を娶する時、居にくゝど戻れなど、いひやる母もありと聞こゆるは、甚しきまどひならずや、これは、愛するにはあらで、にくむなり、よく/\思ふべし　（つゞく）

室

故小山田與清

近頃の人のあらはせし歌の書に、平人の妻を、某室と書たり。いと、いはれなき事なり。有職問答四の卷に、北政所、或は、なにがしの室などいふ事は、關白の室に限るよし見ゆ。桃花蘂葉には、大臣の妻を、室といへる例あり。されど、室とは、必、三公の北方ならでは、いふまじき稱なり。後室などいふも、三公の未亡人の稱と見ゆ。愚管抄には、政子の事を、賴朝が後家と書きたり。（本朝文粹に、太政大臣御室家と有り）

北の方

北の方といふ稱は、三公より以下、國の受領の妻に至るまで、しかいへること、空穂、源氏、榮花など、考て知べし。こは、必、本妻の稱なり。今も、五位以上には書べきなり、

母、妻、女と書例

父にしたがふ時は、某女と書き、夫に適時は、某妻と書く、或、北方とも、室とも、簾中とも、御臺所とも、その人の位によりて分るべし。夫におくれて、子にしたがふ時は、某母と書なり、右大將道綱母などのごとし。これ、婦人三位の義によれるなり。

こぼれ梅

渡部乙羽

其十三

あるに甲斐無き身と思ひながらも、浮世にあれバ憂き事に責められて、涙に袖を干しあへぬ人ぞ悲しき。別けて女性の身は、粉膩のたしなみありて、紅よ化粧よと娑婆を飾り、世間を躰よく包み、枯木に色香を添へつゝも、稻舟の招く方に漕ぐことの口惜しさ。

原宗右衛門の娘お琴は、親に離れ夫に別れて、今は從ふべき人も無く、盛りの花を無殘や、頭ごぼと剃りこぼちて、墨染の衣に昨日の色香を包めり。

お粂は固より埋木の、其儘朽ち果つべき身を、亡くなりし夫に操立てゝ、吉良家へ奉公に住み込み、首尾克義士に本懐を遂げさせて、これからは浮世に用なしと諦め、これも優しき尼となり、圓頂白衣の垢無き境界を樂しみて、念佛修行に餘念無し。

一所不住の僧ならば兎に角、形ばかりとは云へ、乾坤の間に結べる草の庵ありては、夜半の嵐に袖濡らすこともあらで、唯一念に佛を信じ、花を供じて、過ぎ行く月日を送りつゝも、なほ待たるゝは義士の消息なり。

世に恐ろしき大罪を犯せる夫すらも、家に待ち居る妻の心になりては、一日も早く牢屋を出でよかしと、待詫びける甲斐も無く、出家の今もなほ戀ひしき矢間が、父宗右衛門と諸共に、泉岳寺に於て四十七士殘らずの切腹、も一度逢うてと思ひし綱も斷れて、お琴は漕ぎ行く船に離れて、沙上に足摺する程の悲しさ。其日初めて罪も無い神や佛を恨んで、聞えませぬと泣く心の不愍さよ。

斯くなりては愈々味氣無き浮世を觀じて、俗を慕ふ念は露しも無く、頭を圓め、白





衣を着け、腰法衣を纏うては、見榮も飾りも無くなりて、年數も積れ、皺の波も寄れ、化粧て見すべき男も無しと、たゞ後生の事を樂みけり。

閼伽桶の淸き水を汲みては、眞如實相の月影も宿れかしと願ひ、花を佛壇に手向けては、天より種々の花も降れよと望み、偏に我が住む庵を常寂の光土に見て、浮世の風も一切飛んで來な、墨田の土手の塵一本、この竹椽には入れまじきぞと、精進退轉なし。春は鄙ながらも田を温める風の、花を吹いて香を窓に送り、夏木立の淸涼、水も氷にやならむ、秋は虫の音に哀れを覺えて、昔時の夢に涙を浮べ、寒月枯木に冴ゆる夜は、思はず書寫の筆を捨てゝ、淸光卒塔婆を照らすを拜む。あア有難き世や、樂しき娑婆や、俗にありて他人をも神をも怨みたりし煩惱は、實に意馬心猿のうたてき心にてありしと、今は珠數もて肩を拂ふこと屢々なり。

茲に埋もれて幾歳か過ぎけん。訪ふ人も無き柴の戶、水鷄にのみ欺かれしこの庵に、尋ね來給ひて、妾等が素性を問はせ給ふ御身は、如何なる因緣のある人やら、前生は必ずしも一河の流れを汲みける中にやありなん、興も無き長談義は比丘尼が馴れたる口の端とのみ思ひ給ふな、されど御身がいたく怪しみおはする掌裏の刀痕も、今

の話にて大方は察し給ひけん、固よりして浮いて尼となりし身ならば、經も誦ます、佛も念せず、氣儘氣隨に奉加しても世を渡るべきに、嬉しき世の中とて、志ある人は我と足を運びつゝ、喜捨し給ふこと、これ皆大石殿が餘德、人間としてありたきは誠なり。アレあれを見給へ、梅は盛りに咲きたり、咲くまでの辛苦を如何に思ひ給ふぞ、邪魔する雪に枝を折られ、雨風に吹き曝されて、世間を狹め、人に疎まれ、結句花と咲いたる今日の譽は、これに優る草木ありとも聞かず、武士の心懸けはこれ、婦女の手本はこれ、美くしい梅の花では御座りませぬかと、お粂比丘尼は聲麗はしく物語りぬ。男は始終を聞き畢り、膝を叩いて感心し。あア左樣な御身分の方方なるか、さりとは知らで先刻よりの無禮、平に御免下さるべし、我もお目付の役を勤めながら、斯かる名高きお兩方を今日の今まで存せざりしは迂濶千万、笑うてむし下さるな、してまた御菩提所へは折節御墓參なされますかと問へば、比丘尼は爪繰る念珠を止め。はい、殿樣の御命日をはじめ、御家來衆の命日には何日も妾が參ります、これ御覽下さいませ、殿樣はじめ御家中衆の御位牌を斯く弔うて置きますと、紙門を開けて佛壇を見すれバ、まこと香花は新らしく、常燈微に燦びたる過去

帳を照しぬ。
男は四邊を眺め居けるが、弗と片脇に立て懸けある短刀に目をつけ。これ、これは、何で御座る、出家の御身に不似合なと、咎むる如く尋ぬれど、比丘尼は側のお琴を指し。それその尼に問うて見給へ、妾は確とは知らざれど矢間殿が遺物とやら、世を捨てし身とは云ふものゝ、夫を戀はざる妻やあらむ、深く問うて罪を作らせ給ふなと、云ひつゝ稱名申しけり。
いざお暇と立出る男、送り出す二人の比丘尼を後に見て、香に迷うて行く田の畔に、人知らぬこぼれ梅二輪、これも渠の身に似たる花と、神妙に拾うて懷紙に納め、家に歸りて世の人に吹聽しけるに、人は一代にして名は末世に高く、伽羅は香あるが爲めに挫けても、消えぬ薫りの今に殘りぬ。

（をはり）

山家鹿　近衛　忠煕

わが庵にまぢかき山のをしかのねは
馴れても夢をおどろかしけり

旅宿鹿　東久世通禧

ふるさとの夢おどろかす鹿のねに
寝覺さびしきくさまくらかな

鍋島　直大

鹿のなくこゑもきこえて秋やまの
たびねはことにおもしろき哉

前田　利嗣

たび館ねられぬよはにきこゆなり
妻とふのべのさをしかのこゑ

名所鹿　黒田　清綱

もとあらの小萩の露やこぼるらん
鹿の音かなしみやぎのゝはら

旅宿鹿　高崎　正風

眠られぬ草のまくらにきこゆなり
こえにし山のさをしかのこゑ

前田　利鬯

足引のやまのふもとにたびねして
ちかくも鹿のこゑをきくかな

月前露　諏訪　忠元

さま／＼の草葉における白つゆを
隈なくてらすあきの夜のつき

旅宿鹿　宮地　厳夫

草まくらたびせざりせばのき近く
いかできくべきさをしかの聲

鹿　中島　宣門

やまつたふゆふべの嵐ふきたえて
霧にせかるゝさをしかのこゑ

旅宿鹿　　小出　粲

めづらしと一夜はきゝし鹿のねの
侘しきまでになれるたびかな　　坂　正臣

谷かげに宿りてきけむわがこえし
たかねのあたり小男鹿ぞなく　　内藤　存守

旅やかたあひ宿りさへなきよはに
ねざめさびしき鹿ぞなくなる　　大口　鯛二

山こえて野べに今宵はやどれども
なほしかのねの近くきこゆる

秋月勝春花　　上地　信光

花にいとふ風にはさはる雲ちりて
つきのかつらの照り勝りつゝ

柳閒蟲吟　　松浦　辰男

さやかなる柳がはたのゆふづゆに
競ひがほなるむしのこゑかな　　三浦　千春

春かぜの糸よりかけしやなぎむた
あきははたおる虫のまに〳〵

物部大連麁鹿火の妻　　佐々　豊水

日の本の國のみおきてみだりぬと
いさめしことぞ神やをしへし

月　　草野　隆道

都にてみしおもかげもすめるかな

てらす今宵のつきのかゝみに　千日　亮

ことさらに面白きかなやまのはの
松にいざよふあきのよのつき　勝家　貞良

橋上月

あやふさも覺えざりけり秋のよの
月すみわたる木曾のかけはし　鍋島　榮子

旅宿鹿

さを志かの聲めづらしくきゝし哉
今宵のすゑのさとにやどりて　蜂須賀隨子

たびごろもひとりねさむる枕べに
小鹿もつまやこひてなくらん　前田　朗子

いづかたに鹿なくならん旅やかた
枕にこゑのちかくきこゆる　柳原　愛子

男鹿なくかたやま里にたびねして
あきのあはれを思ひ志りぬる　松平　健子

われバかりかなしきくさの枕ぞと
思へどよたゝ志かもなくなり　小池　道子

旅ねするみやまの里のまつはらに
つきかたぶきて男鹿なくなり　北島以登子

たび枕ねざめてきけど名も志らぬ
向ひのやまにさを志かのこゑ

小萩さく野守がいほにたびねして　中島　歌子
をしかの聲もきゝてけるかな

中秋見月　三輪田眞佐子

からやまと今宵たかくも仰ぐかな
月のかつらのかげにはふより

庭萩　安東　菊子

朝きよめ萩のあたりはこゝろせよ
さはらぞちらん露のしらたま

閑居秋來　諏訪　晴子

人とはぬわがかくれがは鳴く虫の
こゑをしるべに秋やきぬらん

少女が書をよめるかたに　小川　昌子

少女子がわけいる文のはやしには
いかなる花かさかんとすらん

野薄　師岡須賀子

人とはぬ荒野のすゝきいかなれぞ
かくしも袖のつゆけかるらん

蟲　片岡　光子

眞葛原あはれなきよるまつむしも
うらみがほなる聲ぞきこゆる

丸山の古墳　師岡須賀子

芝の公園としいへば、先、丸山といふこと、思ひ起すならむ。丸山といへぞ、古墳といふこと、坪井理學士といふことも　また思ひ起すならむ。かく思ひ起すと共に、その丸山の位置、廣袤、奥城なりといふあたりのさま、いかにとおもひやらるゝな

らむ。去る日、ゆきて見つるに、山のたゝずまひ、瓢形して、低き所に、五重の塔建てられ、高き方に、伊能先生の碑あり。其のあたりより、辨天の社の方には、あまた、丘様の小高き處あり。かれこれ思ひ合はすれど、實に、よしありげなりけり。昨日までも、月花に、雪に、納涼に、たゞ、遊ぶ處とばかりおもひつゝ、年頃、近きにありながら、心づかざりつるを、學士が、洋行の途すがら、思ひたたれつるなりとか。こは、またく、學の術の進みにたる結果なるべしと、いと尊くなむ。こゝかしこに、縄打はへたるは、物しられしといふあたりなるべし。この事、一度、よにしられてより、尋ぬる人、とみにしげく、あるは、杖もてほり、小刀もてつきたてゝ試むるも、少なからずとぞ。

今日しも、この區の教育會の、常の集會開かれて、學士の演説ありといふに、雨を念じて、愛宕館に至るに、人みち〱たり。錐を立てん隙もあしとは、この事にやと覺えぬ。何れも、このはなしきかんとてなるべし。その説明、いと詳らかにして、圖しても、また、得られたるもの示しても見せられたり。なほ、古の奥城の制、瓢形したるゆゑよし、はた、他の丘の形によりて、五個の古墳ありといふこと、また、埴輪、土器などによりて、いはゞ、紀元七百年代より、九百年代のころのものならん。さるは、日本武尊の、東夷御征伐の折のにもやあらんなど、いと精密にのべられたれど、筆及ばねバ、皆はぶきつ。會員の中にも、同じ様したる埴輪、土器など、持ちたるもありて、

捜しなど、幾個もあらん。東照宮の後の大穴やろこより納めたりけむなど、いひあらふもありき。さて、さる奥墓ならんにはと、公よりも、人して守らせ、周圍に、柵しわたすなど、用意疎ならずとぞ。折しも、坂の下に、こ萩咲き亂れ、芝浦に、月のさしのぼるけしきなど、見すぐし難きほどなるを、暇あらん君たち、とひたまはゞ、いかに、學士の勞のほども知られなんものをと、歸りて後、尚ふりやまぬ雨のつれ〳〵に、かくはものしつるになむ。

雜報

●藝妓教育　位高く、金多くもちたる人の、藝妓を好みて、こよなき花とめではやし、世に憚る所もなく誦じ興ずるは、道德廢れたる末ざまの世のならひなり。中には、また、心ざま正しくして、足を花柳の巷にいるゝ事を耻ぢて、身を潔くすめれど、甚しきは、心をさへ奪はれて、はては、その妻、その娘をも、藝妓の樣にせむとはするなり。かしこの宴席に招きし藝妓の髮の形は、いと美しかりきとては、家に歸りて、その妻をして、直に髮を改めしめ、こゝのまとゐに集ひ來し雛妓の衣服の模樣は、いと目とまりきと思へば、又、直に、その娘をして、新に衣を調へしむ。かの

妓は、かうやうなる言語つきにて、かうやうなる笑聲をせりとて、口づから、之を、その妻と娘とに敎へ、かの妓は、かくの如き身ぶりにて、かくの如き歩きやうなりとて、妻女をして、その響にならはしむ。これをしも、藝妓敎育とはいふなりけり。あはれ、かゝる人の妻となり、子となりて、かゝる敎育を受くる女どもの不幸さよ。さても、「上のする事は、下之にならふ」といへど、天が下なべての女どもの心も、いくばくか相背いて藝妓風と化らざるべき。さては、女子敎育の正しきに歸らざるも、亦うべなりや。

●淫れたる聲の中にて、いとも甚しきは、三弦にしくはなし。前の件にのべしが如き好き者は、かの藝妓が、この鳴物もて、興をそふるを見て、こよなき事に思ひなし「小學校にて敎ふる唱歌は、西洋めきて味なく、しかも女子の優美き德をそこなへり。實に、女子の美しきは、三絃を手にして、俗歌うたふにあり」など、道理らしく思ひなしつゝ、その最も〱愛しみ育つる女兒をして、もはら、三絃を學ばせ、俗歌うたはせて、小學校にて敎へし讀書習字の復習をば責めもせず、師匠のもとより歸り來れど、直に、おさらひとやらんにとりかゝらせ、おのれは、その妻に銚子とらせて、酒飲みつゝ、いと樂しげに、聽き居るめり。さて、やう〱醉ひもていけど、興に入りつつ、しわがれたる聲して、自もうめきいづるなり。あなきゝぐるし。あな見苦し。これ、まことに、藝妓敎育の、いとも進めるものにして、その

弊害の、いとも大きに至れるものあり、あはれむべきは、たゞ、この世心なき少女の身なり。おひ立たむその行く末さへ思ひやられて、

●古の教には、「女子の懐妊りし時は、耳に、淫れたる聲を聞かず、目に、邪なる色を見ず、割りめ正しからずば食はず、席正しからずば座らず」といへり。こは、あながちに、懐妊れる時にのみ限れるにはあらず。常も、また、然あるべきは、いふも更なる事なりかし。耳にきゝ、目に見る事をさへ許さず。ましてや、いかでか、みづからその聲をいだし、その色を作りいづべき。正しからぬに近づくをだに戒む。いかでか、その身を正しからざらしむべき。色に、正しき色あり。見て目をよろこばせつべし。聲にも、正しき聲あり。きゝて耳を樂しましめ、發して心を慰さめつべし。正しき行も、亦、かならず、窮屈なるものにあらずぞかし。家を治むとしては、吾も人も、聲を正しくし、色を正しくし、その視聽を正しくし、その行爲を正しくすべし。かくても亦、樂しみ、おのづから、その中にありなむ。まことや、琴瑟の和、關雎の樂は、淫行淫聲の中にはあらざるものぞ。

●女子教育に關する私見　こは、女子高等師範學校教授中川謙次郎氏が、横濱の私立某校にて演説せられしものなりとて、送り越されば、こゝに掲ぐ。世の諸孃、一讀せられなば、大に得らるべきところあるを信ずればなり。

余は基督教には關係なく且淺學無經驗なれば斯

る席に連るが如きは辭するこそ當然なるべきに無遠慮にも此に來れるは故なきにあらず如何となれば教育其の物の性質に於ては素より官民公私の別あるべき筈なしと雖學校に官公私立の別あるは止むを得ざる制にて之がために自然諸學校の氣脈を貫通しがたく教育全般の事を計議する上に於て多少の不便を免れず是余が常に遺憾とする所にして何れの時か好機に投じ全國諸學校相倶に氣脈を通じて熟議するの路を開き以て女子教育に裨補せんことを希望したりしかども未其の緒を得ざりしが今諸君に見えて卑見を陳し幸に教示を受くることを得ば余が平素の希望を實にするの端緒を開くの運に至るべきを信ず是余が淺學を顧ず此に來れる所以なりこれより我邦の女子教育に關する卑見を陳せん

我大日本帝國の普通教育界に於て余輩教育者の注意計議を要すること多きが中にも調和と云ふことは其の主位を占むべしと信ず調和とは純良有爲なる國民を陶冶するに關かる諸勢力事情の統一を云ふなり今日の姿にては我が普通教育の目的を達するに於て妨あることを憂ふるなり然れども普通教育界の情況此の如くなるは其の由來する所によりて察すれば深く憂ふるに足らざるなり我邦在來の教育制度は維新の時を以て其形を収め歐米の教育制度に基きて新教育制度を布き以て其實施を試むること此に廿有余年其の間長足の進歩をなしたりと云ふと雖未新制度の能く我國情と調和して鞏固なる城郭を作るの時期

に達せざるに由るのみ
我普通教育界の調和といへバ學科の調和學校と家庭との調和學校と社會との調和等種々あるが中にも男女教育の調和といふことは其主なる一なるべし 即 男子教育と女子教育とは其 權衡宜きを得て將來幸福なる國民を作るに適せるか如何は大に講究を要すべき問題ならずや　（未完）

●慈善美術展覽會　東京慈惠醫院にては、施療資金募集の爲、今年は、來る二十三日より二十九日まで、美術展覽會を催さるゝ由にて、會員方（貴顯紳士の夫人令孃方にて組織せらる）は、專優等の美術品を蒐集せらる趣なれど、定めて、稀世の陳列品あるべしといふ。慈善の諸孃は、よろしく、一度は、必、觀覽せらるべし。

●をんな文範　佐藤寛氏、さきには、いろ文範を著されしが、今、また、をんな文範を著されたり。全部二冊の、頗美本にて、京橋區八官町庚寅新誌社より、發賣せり。

兼題

十月廿日
歌……………名所千鳥
文……………和歌の論

十一月五日
歌……………夜水鳥
文……………冬野

餘芳

心つくし（つゞき）

稅所敦子

三日ばかりありて、やう〳〵、日影みえ、水も、すこし、ひきつときくに、いと、うれしうて、いそぎたちぬ。けふも、なほ、うちくもりて、風すゞしう、名殘露けき青ばのかげを、こぎいづるほど、いと、おもしろし。

かしは木のしづえをひたす川浪にふねさすあさはすゞしかりけり」。都をたちて、廿二日といふに、つくしの地には、こぎわたりし。今は、浪路をさへ、へだてつとおもふにも、いと、むねいたくて、

もゝへ山へだつ都をけふはまたなみのよるにもなしてける哉」。此の濱のまつ陰に、しばし、やすらふうち、まさごにまじりたる、うつせ貝ども、いろいろ、めなれぬさまなるを、をさなきものと、ともに、ひろひまさぐりつゝ、

ふるさとはおくらんつてもなきものをぬれ〳〵ひろふかひやなになる」。忘貝は、えこそ、みいでざりけれ。ゆき〳〵て、肥後國山がといふ地にやどりしは、いみじきいでゆありて、家のうちまでも、ひきいれたり。都あたりにては、有馬の湯などこそ、よしと、き〳〵わたりしか。それすら、はるかなるほどなれば、おもひもたゝで、すぎきつるに、ゆくりなく、かう、めづらしきところにやどりて、しばし、とゞまりても、あらまほしきを、限あるたびぢにて、心にまかせぬぞ、いと、くちをしきわざなりける。水無月近う、なりもてゆくまゝに、れいのとしよりも、暑さ、たへがたう、土さへさけて、てりわたるに、乘物のうちは、まして、こがるゝばかりなれど、なほ、すこしも、すゞしきかたに、をさなきものを、ゐさせまほしくて、おのがみは、日影をも、いとひはぬ、やけ野のきじのこゝろ、身のうへに、おもひしられたり。

うつせみのみはなきもの になしつゝもおもひはなれぬ此の世なりけり」。

このあたりなりけん、よしある野べをすぎしに、道のほとりに、いとも、きよらかなる水、小川めきて、流れたり。音なひ、なつかしう、玉もの、うちなびき、秋つはの、とびちがひあへるなど、加茂の糺の川べに、いと、よく、にかよひて、たちとまるべき柳のかげ、すべて、夏のほかなる、こゝちせしかど、れいの、むすぶべうもあらでなん、なか〳〵、こゝろのみ、とゞまりし。

　いさゝ川水の心はあさけれどおもふかたよりかよひけるかな」。道の空にて、月もかへりぬ。水な月朔日といふに、けふは、かの國に入るべかなりなど、いひさわげば、なにとなう、心づかひせられてなん。雨降りいでゝ、道もはかどらず、やゝ、くれ過ぐるころ、關をこえぬ。此のあたり、松原、をかしげに、浪の音、ちかう、きこえて、ひるならましかばと、くちをしう、おぼえき。又の日も、なぎさちかき家にやどりて、はしちかう、見出だしたれば、千里の外より、たちくる浪の、いと、あらましきに、をりしも、かぜ吹きそひて、みる〳〵、磯近き いは

ほどもの、涙の下に、かくろひゆくさま、いと、おそろしう、めづらか也。むかふたといふところに、一日とゞまりて、けふは、皆、かしらあらひ、はくろめつけなどす。おもづかへやうの者は、きぬあらひいとなみ、おの〳〵、あすの心まうけともすべし。かで嶋にいるべき日は、れいのやうに、いろがしうもあらで、こゝろのどかに、髪けづりなどして、けふぞ、終のみかには、かへりつくべきと、うれしくも、さすがに、むねやすからで、都人と、まちおもはれんに、あやしの、山かつめきたるさまして、さし出でたらんことよと、はつかしくも、わびしくも、さま〴〵、おもひみだる。水上のさかといふところまで、人々、あまた、いでむかへたまひてなん。此のほどは、おもたゝしきことおほく、なにでとも、おもひやりしには、たがひて、いと、うれしう、こゝろおちゐぬ。すむべきところは、川ちかく、かの、にしでりのやどにも、おもひよそへられて、まどのくれ竹の、うちなびくさま、垣ほの朝がほの、日かげまつ色も、都おぼえて、なつか

しきに、よる〳〵は、月、いと、よく、さしいりて、はしるすゞしく、すべて、心ゆくすまひなれど、なほ、ともすれば、すみなれしかたのことのみ、こひしう、おもひいでらるゝは、われながら、すべなきわざになん。

　忘れてもねなまし物をふるさとのおもかげ見するよはの月かな」。さすがに、いまはと、うちゆるぶにつけては、おのづから、旅のつかれ、とりそへて、そこはかとなく、なやましう、いたづらに、おきふしくらすほどに、いつしか、桐のはの落つるころにもなりにけり。さらぬだに、なれぬすまひの、物わびしきに、此のほどは、あらき濱風も、いと、しげう、かよひきて、枕近く、おとづるゝに、しほなれ衣の、うらかなしさは、たれに、うれひきこゆべきやうもあらでなん。

　みやこにもみにしむものとおもふらん心つくしの秋のはつかぜ」。かりなどの鳴きわたらんころ、まして、いかに、あはれなること、おほからんかし。

（をはり）

教の庭

十月五日兼題　閑庭落葉

（天地人の外は原稿到着順なり）

天　長野縣東筑摩郡鹽尻村長畝區　河野文子

けふよりは落つる紅葉を友と見ん
　庭のちぐさも志もかれにけり

地　大坂府西成郡今宮村　松田とも子

隠れ住むかひこそなけれ世の人に
　とはるゝまでに落葉してけり

人　熊本縣山鹿郡山鹿町大字宗方　本田きよ子

世をすてゝすむ山里のいほりにも
　あはれを見せてちる紅葉かな

石井徳子

さびしくも竹の網戸をさしこめて
　落葉にうもるにはのおもかな

石井かめ子

冬ざればとふ人さへもなかりけり
　よはの落葉のおとばかりして

伊藤海子

かくれ家に庭のこのはの乱れきて
　人かと見ればあらし吹くなり

藤井つや子

人とはぬにはにも冬はおとづれて
　こずゑの木葉散りつもるなり

佐々有鄰子

よにうとく掃はぬ庭もへだてなく
　風はもみぢをちらしてぞふく

小橋幸子

とふ人もなきわがにはの朝ぎよめ
　掃へばまたもちるこの葉かな

千々波橋子

冬くればいとゞはらはぬ浅ぢふの
　にはにいぶせくちる木葉かな

さらぬだに淋しきものを冬ざれど　新野尾嘉起
たえず落葉のおとをきくかな

隠れがにちるもみぢ葉の音きけバ　片岡　光子
かた山おろしけふも來にけり

柴垣に世をへだてたる庭のおもに　羽田みね子
おとなふものは落葉なりけり

人とはぬしづけきにはも此の頃は　羽田たか子
しぐれとともにふる紅葉かな

のがれきて住む山かげの柴の戸は　本田せき子
落葉のほかのおとづれもなし

人とはでこけむす庭はさびしくも　江馬　信子
こずゑのもみぢ風にちるかな

鳥のねもまれにきこゆるわが庵の　諏訪　晴子
にはの落葉のおとのさびしさ

くれなゐの塵はさけにし庭ながら　横山　穀子
風にとはれてちるもみぢかな

ちりをだにはらふ人なきわが庵は　土生　淸子
落葉にとづるにはのしをり戸

柴の戸をしば〳〵たゝく音はして　上野かね子

ぬれぬ時雨やおつるもみぢバ

かくれ家の庭の落葉をふきまきて　高井　米子
あらしの風ははげしかりけり

冬ざれバいとゞさびしき隠れ家を　平澤とよゑ
おとなふものは落葉なりけり

人とはぬ宿にしあれどふゆざれど　春部まさ子
まなき落葉のおとぞたえせぬ

かくれ家の筧はにはにわりながら　馬場とく子
紅葉がしたにうづもれにけり

我が宿は人こそとはねふゆざれど　川村ちま子
おちばのおとぞ賑はひにけり

我がやどの落葉が上をふくかぜの　西田　孝子
おとより外にとふひともなし

とふ人もなき我が宿はなか〳〵に　波岡　しま
落葉のころぞしづこゝろなき

とふ人もまれなる宿に夜もすがら　佐藤とみ子
音なふものはおちばなりけり

人とはぬ庭をさびしみきのふけふ　花岡　梅子
おとづれがほに木葉ちりつゝ

訪ふ人もたえてあらねど我が宿の　白井くに子
はらはぬ庭につもるもみぢ葉

訪ふものは峯のあらしに誘はれて　内田　慶子
にはに散りくる木葉にぞある

繁りつるむぐらもいまは冬かれて　内田　雪子
木の葉にうづむ庭のおもかな

たえてとふ人しなければ柴の戸を　野尻　鶴子
打つ木葉にもおどろかれつゝ

わけてくる人なき庭のながめには　中村　備子
木々の落葉ぞたのしかりける

夕まぐれおとなふものは庭の面に　山本　澄江
ちるもみぢ葉の外なかりけり

さびしくも獨ながむるふみの上に　南大路正子
音のみ落つるにはのもみぢ葉

こむ人をまつ夕ぐれにおとなふは　南大路芳枝
槇の戸たゝく木の葉なりけり

入り日さすかげを梢にとめおきて　植木　綱子
しづけきにはに散る紅葉かな

ふりはへて人もとひこぬ庭の面に　青木　春子
二ひら三ひら木のはちるかな　松田　靜枝

もみぢ葉は冬と散るなり花咲きし
春だにひとのとはぬいほりに

機織のひるもこゑせしにはの面に　松田いし子
にしきおりしく木々の紅葉ば

柴のとは紅葉のにしきちりしきて　松田つぎ子
ふまゝくをしき庭となりにき

身ひとつにあきの哀のつもるまで　薬師寺芳子
この葉ちりしくかくれがの庭

世の中のちりをもすゑぬ我が宿に　永井さい子
つもるは木々の木葉なりけり

吹きすさぶあらしの後の庭の面は　島田　悦子
おち葉ぞ深きかくれがのには

おのづからとふ人たえてなき門を　二葉まつ子
叩くはきりのおち葉なりけり

さらぬだに音なふ人のおとたえて　高橋たか子
淋しきにはに木の葉しぐるゝ

こがらしの風のみまどに音づれて　千日　文子
にはは紅葉にうづもれにけり

閑なるにはのもみぢばこがらしに　永易　瀧野
さそはれ散りて錦しきけり

かぜさむみとふ人もなき我が宿は　永易　幾野
庭のおちばもしづかなりけり

ふみわけてとふ人もなしわが庭は　勝家かをる
幾重木の葉のちりつもるらむ

落葉きくいほのゆふべの淋しさに　土屋てい子
なみだしぐるゝおく嵯峨の里

さらぬだにしづけき宿の庭の面に　上田　國子
哀をそへてちる木の葉かな

日にそひて人めかれゆく庭の面に　上田はつ子
いやはかなにもちる紅葉かな

ひとゝはぬにはに音なふ落葉をぞ　加藤きみ子
時雨のふるとおやまたれぬる

つもる上になほ散りそひて隠家を　松井たまみ
埋むばかりのにはのもみぢば

世ばなれてひるもしづけき蓬生の　川口とは子
やどとふものは落葉なりけり

世をすてししづが庵もふゆざれば　青柳　茂子
うきにはもれずちる木葉かな

人とはでこけのみむせる庭の面は　廣田とめ子
おち葉も風にさわがざりけり

世の中をとほくはなれしわが庵は　青柳いわを
にはの落葉のおとばかりして

ひとり見てをしと思ひし紅葉をば　師岡千代子
庭のあさぢにちりはてにけり

このごろはとふ人もなし山ざとの　稲田こと子
庭のおち葉もふかくなり行く

秋の色のふけ行くまゝにわが宿の　尾崎なほ子
にはのおち葉も深くなりけり

人とはぬ庭のおち葉のおとすみて　松井　君子
こづゑさびしき冬はきにけり

庭の面はちりし紅葉にうづもれて　久保田律子
さびしき宿もふゆはきにけり

てる月のほかにはとはぬわが宿の　山口きよ子
庭しづかにもちる木の葉かな

人とはぬやどは庭さへあれはてゝ　中村喜代井
きゞの落葉にうづもれにけり

人とはぬわがかくれがの庭の面に　横山　錦子
ゆふべ淋しき木の葉ちるなり

誰まつとしもなけれども　二科　松子
ふみわけ難く見ゆるかな
このはふりしく庭のおも
露さへふかくおきわたし

十月五日兼題
時雨ふる日人の許にやる文

天　長野縣長野町　勝家かをる

ふりみふらずみ定めなきこの頃の時雨の空いかにおはしますらむ片山里は庭の落ち栗のみならでは露おとなふものもなし秋のかたみに殘りたる木々の紅葉も折々しづくと共に爭ひ散りてさびしさは一しほまさり侍りぬるを今なむ晴れ間にさふらへばよりはへさせ給ひてさいつ頃御催ほしの歌合かつは近頃の御名吟など御もらし給ひ傍ら日頃の御心筑紫琴の一ふしをも試み給はりなばこの徒然を慰めていかばかり樂しからむと迎へ人奉りぬ妹共もいかでとひた待ちに待ち侍れど道の程はわびしうもおはさんなれど必ず／＼渡らせ給ひてよかしこ

地　熊本縣山鹿郡山鹿町大字宗方　本田せき子

冬のしるしとや降りみ降らずみ定めなく打しぐるる空のけしき如何にながめさせ給ふらんいつしかとまたれ侍りつる紅葉もやがてすぎぬべけれど此空にては御供仕うまつらんもいかゞといと口惜しこは水の江の物語とて中島の翁のものし給ひしいとめでたき書なれど徒然の御なぐさみ草にもとまゐらす猶近きほどにさぶらひて萬きこえあぐべくこそかしこ

人　府下芝區三田四國町　師岡千代子

ふりみふらずみといひけん古歌のごとくかう定めなき時雨のあめのわびしさにえしのびあへず御け

しき承り侍る玉しき渡す都の内の御住居はしめやかになつかしき御遊興どもせさせ給ふらんを門とぢし八重むぐらかれ〳〵の淺茅の虫峯の男鹿麓の衣板とりわつめて心つくしなりし秋のくれぬと思へど又から打時雨るゝ事よ去る頃避暑にとて立よらせたまひし折萩さかど菊の盛になど宣はせつるをいかに忘れたまひぬらんたまさかには山里のあはれも御覧ぜさせたまへ拾ひ置つる木の實くさびら昨日つみとりし新蕎麥もはべりそれらのもの參らせつゝ種々のこと聞え承らまほしうはべればこの頃の雨の定めなきにならひ給はでかならず〳〵とはせ給ひてよあなかしこ

佐々有鄰子

もみぢどのにしきたちきるしなどの風にさきだちてしぐれがちなる片山ざとは朝な夕なにとひくる人も鳥のねも冬がれにたるけしきのなにとなうきてえわげ奉らまほしう侍りて色なきとのはを

さだめなくしぐるゝ雨の音づれも
　　いとゞさびしき山かげのいほ

とうちうめかるゝもをりからあはれときこしめしたまひて一言の御かへしたまはらばふさがる心の雲もはれわたり侍らんあなかしこ

佐野とみ子

をだまきのいとくりかへすごとくとかやことしの秋もいつしかすぎて心ぼそさも身にしみ候へどあやしのやどながらけふしも庭の落葉をふみわけ給はんことをよべよりこひまゐらせてわかし候ひしをあやにくの時雨いとうらめしくひとり窓の本にて文机のふみどもくりかへし見れども猶やる方なきまゝにいかゞすぐし給ふらんみけしき承らまほしく御心やりにもと阿佛がいざよひの日記一まきまゐらせ候かしこ

山本　澄江

薄墨にはしり書きして御けしき奉る哀しき秋は過ぎ行きしと思ひしにそらかき曇り時雨るれど物哀しく紫式部のかゝる折に友どちとしぬびあひ給ひ

し故事さへ思ふにつけてもいかにおはしますらんと心もとなきまゝ筆のあゆもはかゞらねど御有樣のきかまほしうてなんあなかしこ

大亦　隆子

紅葉色ますなかだちと思へばゆかしきはしぐれなれど親しくむつまれし秋も暮れぬと思へばいとどしうあはれに袖もしめりがちなるは都も山も同じといひけむをけふしもあさよりのしぐれの空にさなきだに訪ふ人もなき妾が柴の戸はとりの聲さへきこえ侍らず只しきふる雨に破床の虫のものさびしうなく聲かなしくさびしきにはなれにし身ゐいと心細う覺え侍るを里にも人にも近きおん身がゆたけき門のけふはいかにすごし玉ふらんおんはらからたのしきまとゐにみ歌たゝかはし玉ふにやあはれ友もなき妾に一首をおくり玉へかしはた亦一曹のおんかへりの筆まちあげまつるになんかしこ

植木　鋼子

はれくもり定なき時雨ぞ冬の初めといひけんげに此頃のならひとはいひながら空のけしきのたゞならぬ見る間に日影おほふ村雲のやう〳〵絶々に成行かと思へど跡吹送るこがらしに誘はれあやなくも降來る雨にいとゞはしあへぬとき洗ひ衣の袖ももすそもしぼる斗り夜は閨の板戸に音づれて幾度か夢を破られ明暮のどかなる折とてはすくなきをとりわき今日は朝まだきより降込て晴間も見えぬに風さへ添はり侍ればいかに侘しうおはすらんと折にふれたることしをそれかいしるし御目にふれ參らするにあはれ御笑ひぐさとも成りなばいと嬉しうなんかしこ

定めなくしぐるゝそらの村雲は
君があたりをいかに過ぎけん

松田　靜枝

ほろ〳〵と紅葉を誘ふつれなき時雨の降り初めしにきのふけふはいかなる夢をや結び玉ふらむまことや昨日は同じ學びの窓の孃たちつどひ來給ひて四方山の物語のついでに誰にか侍りけむいにしへよりの貞婦といひ烈女といふ中にて世にゐてはや

さるゝ袈裟の前と靜御前といづれかまされる孃たちの心のほど／＼承りなむといひいづれも誰れもたれもそはいとおもしろかりなむといふ程に傍よりあはれ靜御前こそ女なれ女は貞操を第一の美德といふなるにかの瀧澤馬琴ぬしが著書質屋庫に袈裟の前が苦節といふ一條あるを見れバやゝ其行ひにいふべからざるものありしならむさては女の龜鑑として物足らぬ心地のせられなむあはれ吉野の山の雪より清き靜の前こそ女のうちの女なりけれと賤の小田卷繰返して其功をたゝへけれバいなとよ其の言は異なるべしげに曲亭翁は博覽多識におはしゝならむさはいへ萬に一つの過なくてやはかつは馬琴ぬしには博識を衒ふとかいふ一つの癖のおはしゝと聞くさるはこの袈裟の前が一條の物語も例のあまりに深く思ひひがめ玉ひしよりの說にはあらざるにやいぶかしうこそよしいふに堪へざる行ひの袈裟の前にありしにせよその一死より文覺といひ俊乘といふ二人の聖僧を代にいだしゝを見れどまことに甲斐ある死樣なりこを彼の靜御前が鶴が岡に霓裳羽衣の袖ひるがへし却て兄賴朝のいかりを招き郎君義經の死をはやめたるにくらべなバなどいひいでかの雨夜の品定にはあらねど此の頃のいぶせき袪もいと興あるまとゐとはなりぬ只御身のおはしまさずて座に物定の學者のなかりしこそいとも／＼口惜しかりけれ昨日はかくて暮れぬ今一度圓居して論つらひ殘しゝふしを聞きはてむと今しも孃たちのつどひ來給ひぬあはれいそぎみ車をまげ玉ひて此のまとゐにえならぬ花の香ひを添へ玉ひてよひた待ちに待ち奉るになむ只一時も千秋の心地にて

島田　悅子

文よみあきてものうき折やたそがれのそゞろあゆみの其みぎりあるは日和のどけき日曜などには妹が手を引いて庵にちかき野べに出でゝ錦おりなす紅葉のけしき小鳥さへづる森はやし其さまの見事なるをめでつゝ携ふる手籠に摘める草花のいとうるはしく子供でゝろにも妹がよろこぶ樣のらうたげなる想ひ出してさへ心なぐさみともなりにけり

野邊のこまやかなるははや過去となりて今や哀れに見ゆる其けしきあれし庵の高窓よりながむるもうたてし今日は朝まだきより時雨きて特更に思はれにける妹がくり事に先つ頃遊びし事など言ひ出でゝくらしぬおん身いとまもあらばおはこびあれかしな供々に學びし跡の話などなして一日二日の時雨をおくり又の晴るゝをまちて野あそびをも企てむやと思ふまゝまうし出でぬあなかしこ

加藤きみ子

けさしも時雨のふり出でければつれ／＼の友にもとひとり文机にむかひて文どもくりひろげつゝみづからなぐさめがはなるも猶ふりにしむかしの事ども思ひ出でられていと心ぼそさのはれまなきに折から隣の琴の音しめやかにたえ／＼聞ゆれば一しほあはれに覺え候ひきいづかたのみ心も同じ御さまにやおはすらんさてもみ館にはけふしもいかに渡らせらるゝにやとくうらゝかなるおもしろきみけしきうけたまはりてんとかくなんかしこ

青柳　茂子

都にもいつしか秋のたちそめて庭に散りしく木の葉にもすゞろ哀れを催し侍るにかたさまにはいかがくらさせ給ふらんといとなつかしうこそ折からよべよりうき雲さだめなく時雨のそらとさしかはりたつたの川のもみぢ葉も此たびごとにや色のますらんと思へばいさゝかたのしくもあれど秋はなはさみだれよりも物悲しくていとつれ／＼に侍れどこをなぐさむるよすがにもと今より茶のむしろを開きひごろよりの御手なみをも拜しまゐらせ度何とぞしづが伏家をいとひ給はずにあはれみくるまよせ給ひねかし

廣田とめ子

此頃は時雨ふりつゞき梢の紅葉はみな風にさそはれていとあはれなりさて見るがうちに空のうき雲とほき方にはれゆけどあめにかびぬるきぬなどとうでゝときあらひはすまさへなく又空のかきくらしあわたゞしうふり出でといるれどまたはれさだめなき空こそすべなきものにはありけれ御許にはたゞ／＼文の窓によりそひていそしみ給ひ敎の

庭のなでしこを日毎におほしたて雨をうしともおばさで歌に文に言の葉の花さへさかせ給ふらん身業にて日に月にみこゝろの色もいとこき紅にそめいで給ふらんとおもひはべりぬれバ

君が身にまとふ紅葉のにしきこそ
時雨にいろもいやまさるらめ

青柳いはほ

神無月の空のさだめなきものとはしりながらなほきのふけふのけはひいとはしたなしや心づくしの秋のもみぢもはやくろめつくしぬれバ今は又しぐれのあめにちりそめて此頃の淋しさやる方なくまどのふみにもうみぬれバもし少しのみいとまもおはさバやつがれも久々打絶し糸竹のしらべもかゝるをりにはいと／＼心やりならんを君にも大和琴に笛などとりそへていかで御車をすゝめたまはじやいなやかへりごとまちはべるになん

つらけれど
うらみんとはた
おもほえず
なほゆくすゑを
たのむ
みなれば

國光は忠孝節義の士氣を激勵し固有の美風良俗を扶植し以て邦家進取興隆の基礎を鞏固にし殖産軍備教育の法廣く宇內の秀美を蒐め富强の策を講するを務とす其時事を評し活勢を論するに當りては公平の眼を以て大局の上より國家の利害を觀察し太古に溯り萬世に亘り時流を趁はす世好に投せす卓然獨立正言公議眞理中道を得以て國光を世界に照被するを旨とす

國光

毎月二回
十日廿五日發行
一冊代金拾三錢
但全國無遞送料

國光第六卷第十一號目錄

發行所
東京京橋區築地二丁目廿一番地
國光社

女鑑第四十七號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通迷にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書は一切受取不申候事

女鑑
毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿六年十月四日印刷
同　年同月五日發行

東京麴町區平川町五丁目十六番地
發行兼印刷人　川崎直衛

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯人　山根勇藏

同
發行所　國光社

(赤坂區赤坂田町二丁目十五番地國光社印刷部印行)

〔明治二十四年八月八日內務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可〕